

埋報

136

P4-4

いま びら

# 今平 1 号墳発掘調査報告



1号墳石室

1990年3月

鹿児島県西之表市教育委員会

## 序 文

種子島の古墳時代の解明をと、これまで多くの島民が待ち望んでいた今平古墳群の発掘調査は、西之表市教育委員会が計画し、鹿児島県歴史資料センター黎明館に調査を依頼して実施しました。

これまで、多くの考古学研究者の間では、島内で数多く発掘された縄文時代・弥生時代の遺物、特に種子島実業高等学校敷地内及びその周辺地域から出土した遺物や、環状に位置する自然石の巨石群からして、古墳の石室構造の遺構ではないかと云われ、種子島の古墳時代の解明が待たれました。

種子島は古くから、中国や南島との文化史の中で重要な役割を果たしてきたことは、これまで数多くの記録が証明しているところです。

今回の発掘調査で、種子島の古墳文化の研究調査がスタートしたことは、これまでの種子島を考えるうえで多くの指標が与えられ、その意義は大きいです。

発掘調査を直接実施していただいた、鹿児島県歴史資料センター黎明館の職員の皆さんや、発掘作業員として協力された方々、また土地を所有管理されている種子島実業高等学校の校長先生はじめ多くの先生・生徒の皆さんに厚くお礼申し上げます。

ここに、発掘調査の概要をまとめ、今後古墳時代解明の資に供します。

今後とも文化財の保存・保護について、より一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成2年3月

西之表市教育委員会教育長 鳥居士郎



## 例 言

- 1 これは今平古墳群解明のため、西之表市教育委員会が計画実施した今平1号墳の発掘調査報告書である。
- 2 調査の結果、自然状態のものと認められたが、本報告書では記述の都合上、1号墳として記してある。
- 3 周辺遺跡を理解していただくために、種子島実業高校敷地内出土の遺物、および高校所蔵の遺物を付章にして紹介した。これについては河口貞徳氏（鹿児島県考古学会会長）、種子島実業高校の協力を得た。記して厚く謝意を表したい。
- 4 本報告書は池畑耕一・松山友子が執筆・編集した。
- 5 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書は、従来番号なしであったが、これまでのものを下記のとおりとし、本報告書を6とした。
  - (1) 本城・田之脇遺跡調査概報 1973年
  - (2) 上能野貝塚発掘概報 1973年
  - (3) 赤木遺跡・下剝峯遺跡・大四郎遺跡・内和遺跡 1978年
  - (4) 馬毛島埋葬址―西之表市椎ノ木遺跡 1980年
  - (5) 俣江遺跡・高峯遺跡 1985年

## 目 次

序文	1
例言	2
目次	3
第1章 調査の経過	5
第1節 調査に至るまでの経過	5
第2節 測量調査	6
第3節 調査の組織	7
第4節 調査の経過	7
第2章 遺跡の位置及び環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第3節 今平古墳群の概要	13
第3章 1号墳の調査	17
第4章 まとめ	20
第5章 種子島実業高校所蔵の遺物	22
第1節 土器	22
第2節 石器	26
第3節 まとめ	29

## 挿 図 目 次

第1図 巨石群	5
第2図 周辺の遺跡	10
第3図 周辺遺跡採集の土器	12
第4図 種子島実業高校敷地内出土の土器	13
第5図 種子島実業高校敷地内の遺跡分布図	14
第6図 2号墳蓋石	15
第7図 4号墳周辺地形図	16

第8図	4号墳石室	16
第9図	1号墳南西側トレンチ断面図	17
第10図	1号墳周辺地形図	18
第11図	1号墳石室	19
第12図	種子島実業高校所蔵の土器(1)	23
第13図	種子島実業高校所蔵の土器(2)	25
第14図	種子島実業高校所蔵の石器(1)	27
第15図	種子島実業高校所蔵の石器(2)	28
第16図	種子島実業高校所蔵の石器(3)	30

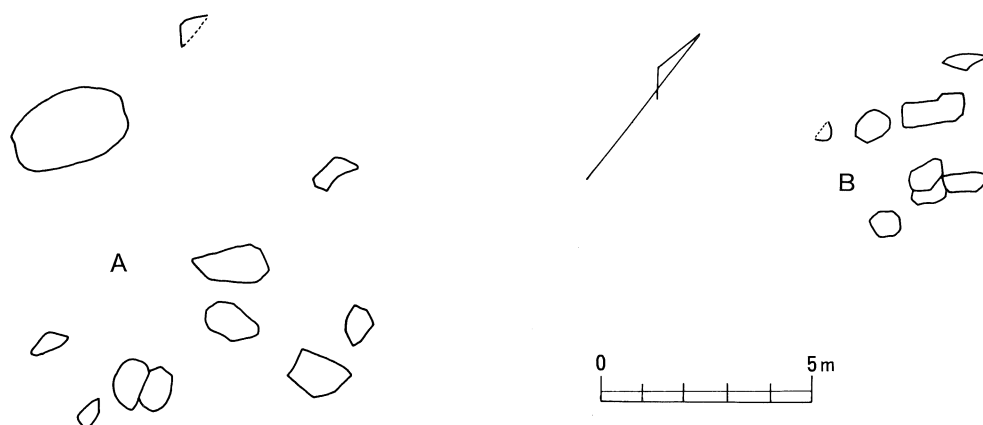
## 図 版 目 次

図版1	1号墳近景(北東から, 昭和62年撮影)
	1号墳遠景(北から)
	“ (西から)
図版2	1号墳近景(北西から)
	“ (北東から)
	“ (南西から)
図版3	1号墳南西側トレンチ断面
	2号墳の天井石と思われる巨石
図版4	4号墳近景(南東から)
	“ (東から)
図版5	西之表市国上採集の土器(寺師見国採集, 黎明館蔵)
	西之表市採集の土器( “ )
	種子島実業高校敷地内出土の土器(河口貞徳氏蔵)
図版6	種子島実業高校所蔵の土器(1)
図版7	種子島実業高校所蔵の土器(2)
図版8	種子島実業高校所蔵の石器

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

これまで考古学研究者の間では、種子島には高塚古墳は存在しないといわれていたが、地元のひとびとの間では種子島実業高校の敷地内にはそれがあるといわれてきた。存在の可能性が指摘された最初がいつ頃だったのかははっきりしないが、学術的な面で紹介されたのは昭和27年8月の三友国五郎・国分直一・河口貞徳氏らの調査だろうと思われる。同じ年の11月に発行された鹿児島県考古学会紀要の第2号<sup>(註1)</sup>で、国分直一氏は次のようにその紹介をしている。「又同校（※種子島実業高校のことである）裏側の作業地に隣接した地域にはほぼ環状に位置する自然石の巨石群が2ヶ所に見られ、(PL. 1のAはその一つを示す)他に古墳の石室構造の遺構



第1図 巨石群（鹿児島県考古学会紀要から）

ではないかと見られる巨石群が発見された。(P. L. 1. B)」。これが今の1号墳周辺のことである。氏は翌年5月には考古学雑誌第39巻第1号<sup>(註2)</sup>にも同じ内容のことを紹介している。

こうした古代の墓らしいという言い伝えは、代々、高校に伝わってきたらしく同校の要覧をみると、その場所はさわらぬ場所としていろいろな計画から外されている。例えば、昭和38年までは牧草地となっていたが、その年果樹園として造成されている。この造成工事は生徒たちの奉仕作業によっているが、この工事によって先の国分氏が紹介した環状の巨石群は消滅している。たぶん、上の段との間にある土手に寄せられたのであろう。しかし、この石室構造の遺構ではないかとされた巨石群はそのまま残され、38年の要覧ではその部分が用をなさない地として丸く囲ってある。また要覧では指摘されていないが、その上の段には大きな平石があって、ここもまた近寄りがたい場所と言いつたされていた。しかし、この石も昭和47年に温室が建設される際に、お祓いをした後に近くの傾斜地にブルドーザーで押された。今、2号墳の蓋石としているものである。さらに、ここから200mほど南に昭和47年、牛の放牧場が開かれた際、ブルドーザーが石室（石棺のようであったともいわれている。）のように2列に並んだ巨石に当

たり、しばしば難渋したという。この造成によって1基は壊され、1基は埋められたと言われている。こうして学校内、地元民の間では古墳らしいものがあると言いつたされてきた。

いっぽう、これを研究しようという動きも地元研究者を中心として行なわれた。昭和53年には種子島高校郷土研究部と種子島考古学研究会が協力して実地調査をし、11月2日付の南日本新聞に「西之表に石室古墳群？」として紹介されている。平山武章氏は鹿児島県地名大辞典<sup>(註3)</sup>に「従来から種子島には古墳はないとするのが定説であったが、昭和54年、上の原の種子島実業高校の耕地から古墳が発見され、発掘調査が待たれている。」と書いている。盛園尚孝氏は南種子町郷土誌<sup>(註4)</sup>に次のように書いている。「西之表市新城付近にある巨石群のなかには古墳の蓋石とも考えられるものもあることから、古墳の可能性もある」。また昭和62年に南種子町教育委員会が発行した『南種子の郷土研究—社会科』昭和61年度では「種子島には、古墳はないとされていたが、昭和54年、西之表市の上の原の種子島実業高校の耕地から古墳が発見されたが、発掘調査はされていない」と記してある。

昭和61年に、鹿児島県歴史資料センター黎明館の企画特別展『南九州の墳墓—弥生・古墳時代』開催のための予備調査に種子島を訪れた池畑は、当時市教育委員会におられた鮫島安豊氏の案内でこの地を初めて訪れる機会を得た。当時みかん園の中にあった1号墳は2列に並んだ横穴式石室のように見えた。さらに放牧場の近くにある巨石も見せてもらった。その後、写真撮影にも行き確信をもって特別展では最南端の高塚古墳として紹介した<sup>(註5)</sup>。また、62年に書いた「南九州における横瀬古墳群の特殊性」<sup>(註6)</sup>のなかでも少し触れた。63年11月に種子島を訪れた池畑が鹿児島大学の上村俊雄教授とともに古墳群を見に行ったところ、これまでは藪になっていたくわしく調査することができない状態にあった4号墳周辺の竹藪が若干伐採されていた。そこで、状況を把握しやすいこの機会に付近の測量をすればなにか手懸かりがつかめるかも知れないと思い立った。測量は新しい竹が生えてくる4月以前に行なう必要があった。

## 第2節 測量調査

測量調査の実施について高校の協力をお願いしたところ、快く承諾して頂いた。そこで、3月17日から3日間の予定で調査することにした。トランシットやレベルなどの機材については種子島開発総合センターの東洋志所長、田上利男主査に手配していただき、西之表市建設課、都市計画課などの協力を得た。調査は池畑と松山が主体となってやったが、この間、有馬昭男校長、宮路嘉昭教頭はじめ高校の先生、生徒諸氏にはいろいろと迷惑をかけ、また協力を得た。また、東所長や田上主査、立神次郎氏（県教育委員会文化課、現在加世田市教育委員会）、繁昌正幸氏（榕城小学校）、関一之氏（自営業、現在県教育委員会文化課）には仕事の合間をみて測量の手伝いをしてもらった。ここに明記して謝意を表したい。

当初、4号墳だけの測量を行なう予定にしていたが、行ってみると1号墳の周辺がみかん園からピワ園への植替えのためきれいに伐採されていた。そのため急きょ予定を変更して、1号墳の周辺も調査することにした。周辺はまだピワ植付けのための穴が掘られていただけだった

ためスムーズに調査することができた。4号墳については一部、高校の先生や生徒の皆さんの協力を得て竹の伐採をしたが、予想以上に藪が深かったことと、予定を変更して4号墳の調査期間が短くなったために十分な調査が行なえなかった。しかし、これまで石の向きが不明だったことについては一部石の上の竹の根を除去したため、向きを確認することができた。

この調査の成果についてはさっそく隼人文化23号<sup>(註7)</sup>や鹿児島考古23号<sup>(註8)</sup>などにその意義づけなども含めて紹介した。これに対して種子島開発総合センターや種子島考古学研究会などから発掘調査の必要性が叫ばれ、6月議会で予算化された。

我々もこの巨石が石室であれば、高塚古墳分布の南限が下がるだけでなく、種子島の古代史を考えるうえで重要な手懸かりが得られる。発掘調査によって出土品が出れば、古墳の年代がわかるだけでなく被葬者の身分・出自が想定できる。さらに人骨の出土も予想でき、人類学的見地からの考察も可能となる。さらに、ピワ園のピワが大きくなれば、また当分発掘調査は不可能となる。また、こうした果樹園芸の場合はわらなどを敷き込むため深く穴を掘るが、そのことによって墳丘規模の確認がしだいに困難になる。といったような事情もあって調査を引受けることにした。

### 第3節 調査の組織

調査主体者	西之表市教育委員会教育長	鳥居士郎
事務担当	種子島開発総合センター所長	東 洋志
“	“ 主事	宮園憲郎
調査者	鹿児島県歴史資料センター黎明館主査	池畑耕一
“	“ 資料調査編集員	松山友子
作業員	西之表市シルバー人材センター会員	

### 第4節 調査の経過

調査は1号墳石室内の清掃と、周辺調査による墳形と規模の確認を目的として、平成元年9月11日から17日までの1週間を予定した。調査に当たっては所有者である垣内安生校長を初めとする種子島実業高校の先生方には色々とお世話いただいた。また、機材の調達には土木課・建設課などの協力を得た。また、かつての様子を知るために当時この高校に勤められた上妻紀男先生を初め多くの人にお世話になった。ここにあつく謝意を表したい。

#### 日誌抄

9月11日(月曜日) 晴れ

午前中、市長・助役・教育委員会等に調査開始のあいさつに訪れる。機材の点検・準備。

午後から機材を持って種子島実業高校へ行き、学校長へ調査に対する協力などをお願いする。果樹園に人が入らないよう立札・クイなどを打つ。2時30分頃から市長・学校長など列席のも

とでお祓いたあと、石室内に積まれている多くの石を除去する。

毎日新聞社・西之表市広報課取材

9月12日（火曜日） くもり時々雨

クイ打ちをしたあと、十文字にアゼを残し、埋土を除去する。右側2個目の側壁石とみられた石が内側に広がってくる。奥のほうは30cmほどで地盤が出て自然状態の様相を呈してくる。中央部には巨石がのぞいてきた。南西側トレンチでは20cmほどで地山の砂岩風化土が出てきたが、北西側トレンチは埋土が1m以上ある。みかん園を造る時に深く掘られている所もある。西側手前の岩も外へ広がりながらさらに深くもぐっている。石室の前方にも地山が出てきて、一部にはアカホヤ層も出ている。

元実業高校におられた先生や古くからおられる先生たちに過去の様子を聞く。

9月13日（水曜日） くもり

石室の実測。トレンチの断面実測。地学の先生に現地を見てもらい、自然現象としてもこうしたことが起こりうるとの教示を受ける。社会科の時間に2クラス見学。

9月14日（木曜日） くもり

石室の実測を続ける。社会科の時間に1クラス見学。トレンチの埋め戻し。2号墳石室の蓋石と思われる石の周辺を清掃する。

9月15日（金曜日） くもり

実測の続き。2号墳石室の蓋石と思われる石の実測。2時30分から市民・報道機関などに説明会。30名ほど参加。鹿児島県文化課八木澤一郎氏・関一之氏・知花一正氏、西之表市文化財審議委員平山武章氏・上妻紀夫氏・土屋智裕氏・八板恒夫氏・尾形之善氏など見学。毎日新聞社・南日本新聞社取材。

9月18日（月曜日） くもりのち雨

石室の埋め戻し。

## 註

- 1 国分直一「種子島・屋久島先史遺蹟調査報告（二）種子島・屋久島の石器」『鹿児島県考古学会紀要』第2号 1952年11月 鹿児島県考古学会
- 2 三友国五郎・河口貞徳・国分直一「薩南諸島の考古学的調査—第一報種子島北部・屋久島一湊に於ける調査」『考古学雑誌』第39巻第1号 1953年5月 日本考古学会
- 3 平山武章「西之表市」『角川日本地名大辞典』46鹿児島県 1983年3月 角川書店
- 4 盛園尚孝「先史時代」『南種子町郷土誌』1987年3月 南種子町
- 5『南九州の墳墓—弥生・古墳時代』1988年1月 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 6 池畑耕一「南九州における横瀬古墳群の特殊性」『黎明館調査研究報告』1 1987年3月 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 7 池畑耕一「海を渡った畿内文化」『隼人文化』第23号 1989年7月 隼人文化研究会
- 8 松山友子・池畑耕一「今平古墳群の測量調査」『鹿児島考古』第23号 1989年6月

## 第2章 遺跡の位置及び環境

### 第1節 地理的環境

種子島は本土の最南端にあたる佐多岬の、東南海上約40kmの所に位置し、屋久島・口永良部島・黒島・竹島・馬毛島などの島々と共に熊毛諸島を形成している。南北の直線距離が約54km、幅が5～12km、周辺の長さが約150kmあり、面積は約450km<sup>2</sup>である。最高海拔が282.3mしかない、低くて平坦、かつ細長い島である。

基盤となる層は熊毛層群と呼ばれる第三紀に堆積した砂岩、頁岩の互層で、その上を砂岩やシルト岩からなる荃永層群、礫層や砂層などの増田層、長谷層、竹之川層などが不整合におおっており、さらにその上に黄褐色の火山灰ローム層、いわゆるアカホヤ層が堆積している。

地形上は全島にわたって浸食による開析台地や断崖があり、さらに海岸段丘、砂丘が発達するなど、一見単調に見える海岸線もけっこう変化に富んでいる。また、一部には火成岩の層や、河川の下流域等には沖積平野も形成されているが、低い島であるため河川が発達せず沖積平野は狭い。

### 第2節 歴史的環境

種子島における代表的な遺跡を各時代ごとに取り上げていこう。

種子島で最も古い遺跡は西之表市下剝峯遺跡で、縄文時代早期の吉田式土器や貝殻条痕文土器が出土している。塞ノ神式土器が出土する遺跡は各地にあり、中種子町千草原遺跡・同満足山遺跡・同輪之尾遺跡などがその主な遺跡である。それより少し古い平椀式土器は西之表市二本松遺跡などで出ている。約6300年前、島の西方に位置する鬼界カルデラ（今の硫黄島付近）で大噴火が起こり、種子島も大きな被害を受けた。各地にみられる黄褐色火山灰はこの時の堆積である。そのあとの前期の遺跡としては、轟式土器・曾畑式土器が出土する中種子町千草原遺跡、轟式土器が地域化したと考えられている貝殻条痕文土器の苦浜式土器が出土する苦浜貝塚、曾畑式土器が出土する西之表市本城遺跡などが上げられる。中期になると下剝峯遺跡などから春日式土器が出土している。西之表市大田遺跡では後期の土器とともに阿高系らしい凹線文土器が発見されている。後期になると、指宿式土器・松山式土器・市来式土器などが出土する西之表市大花里遺跡、市来式土器・西平式土器や、西平式土器の影響を受けているといわれている納曾式土器、市来式土器の影響を受けたといわれている一湊式土器などの地域性の強い土器が出土する西之表市納曾遺跡、御領式土器のような黒色研磨土器の出土する西之表市奥遺跡などが上げられる。また、西之表市東方ノ平遺跡では、押引文・連続刺突文を特徴とする嘉徳式土器や面縄東洞式土器などに似た南方系の要素をもつ土器が出土し、中種子町大園遺跡では安行式土器に似た関東系土器が出るなど広い範囲の交流が予想できる。また西之表市川氏遺跡ではひすい製の石笛が出ており相伴土器がはっきりしないが、これもまた日本海地域との交易を物語っている。晩期の遺跡としては、黒川式土器とともに歯に水平研磨を施した人骨が発



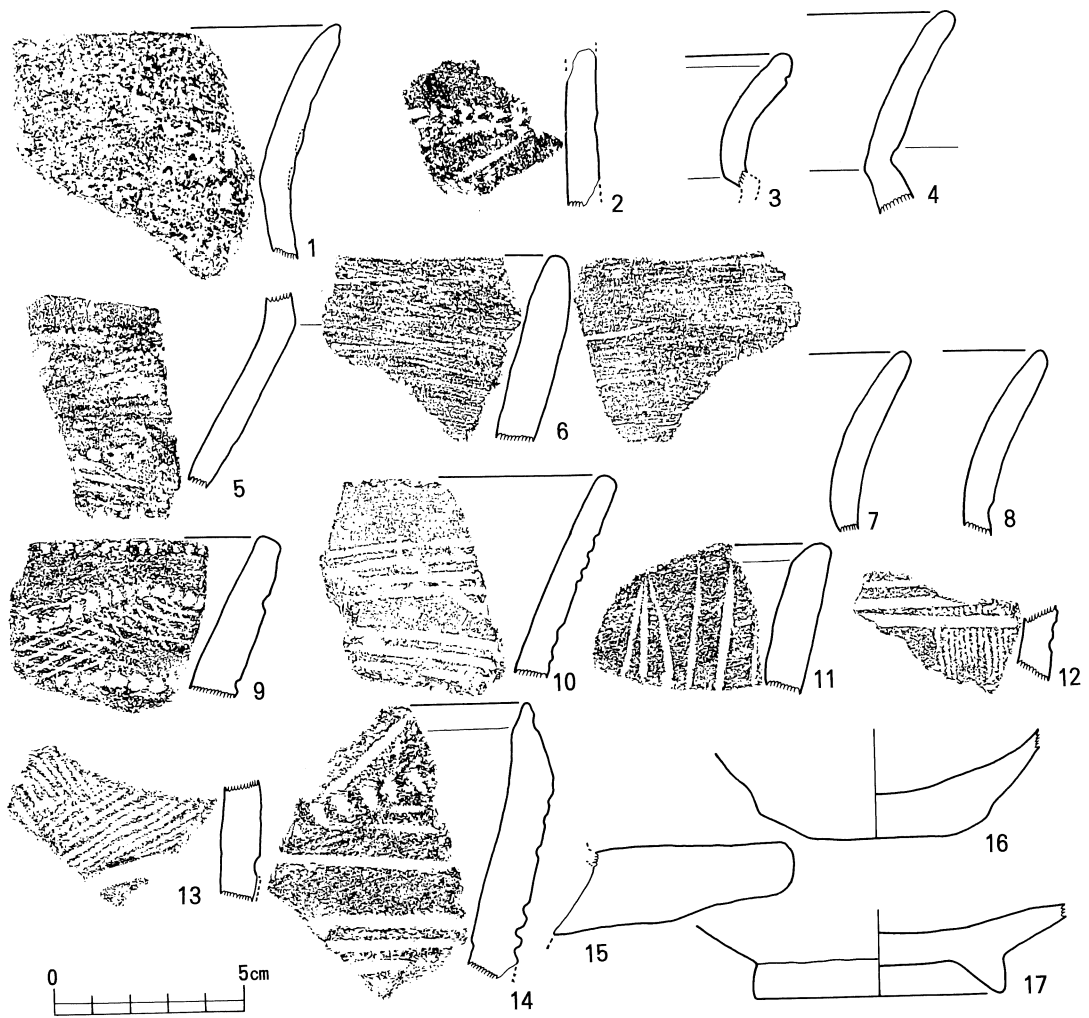


見された南種子町一陣長崎鼻貝塚，黒川式土器が出土した中種子町阿嶽洞穴などがある。中種子町大園遺跡では在地の土器とともに大洞式系統の土器も出ている。

このように，早期から晩期までの各時期にわたって縄文時代は南九州と同じ土器文化圏に属しているが，時にその中で苦浜式土器・一湊式土器・納曾式土器など地域性の強い土器を作り出し，また，奄美・沖縄などの南島文化圏，あるいは関東・東北地方など東日本との交流も伺われる。

弥生時代の前期は，南種子町広田遺跡から高橋Ⅰ式と高橋Ⅱ式に比定できる壺形土器が，阿嶽洞穴から前期末の甕形土器が出土しているだけである。中期の遺跡としては，入来式系の土器が西之表市の下剝峯遺跡・田ノ脇遺跡・泉原遺跡・峯遺跡などから出土し，阿嶽洞穴と広田遺跡からは入来式土器が出土している。中種子町鳥ノ峯遺跡では，覆石墓に中期末の甕形土器が供献されていた。後期の遺跡では，鳥ノ峯遺跡，南種子町本竹丸田遺跡などがあげられる。広田遺跡と鳥ノ峯遺跡は，弥生時代から古墳時代にかけて砂丘上に造られた埋葬遺跡である。石棺状にサング塊や自然石を組合せたり，配石墓や覆石墓で構成されている。砂丘のため人骨の保存が良好で，当時の人々の身体的特徴や抜歯風習など地域の特殊性が確認されている。特に広田遺跡では，上下2層から100体を越える多くの人骨と多量の貝製装飾品が発見され，貝製装飾品の特徴ある文様などから南島や古代中国東南部の文化との関わりが指摘されている。

No.	遺 跡 名	所 在 地	時 期	遺 物
1	今平古墳群	西之表市西之表今平	古 墳	
2	新城出口遺跡	〃 〃 出口	縄文早期 弥生？	塞ノ神式
3	城ノ浜遺跡	〃 〃 鴨女町	縄文～近世	市来式・一湊式・貝輪
4	納曾遺跡	〃 〃 納曾	縄文後期	松山式・市来式・西平式 一湊式・納曾式・石皿・叩石
5	本城遺跡	〃 〃 松島本城	縄文前期 歴 史	曾畑式・磨製石斧・扁平石斧 石皿・叩石・軽石製品 須恵器
6	古園運動公園遺跡	〃 〃 古園	弥生中期	
7	池久保Ⅰ遺跡	〃 〃 池久保	縄文前期	深浦式・集石・磨石・叩石
8	池久保Ⅱ遺跡	〃 〃 〃	縄文前期	
9	大花里遺跡	〃 〃 上西大花里	縄文後期	指宿式・松山式・市来式 西平式・磨製石斧・石偶・叩石
10	伊勢神社入口遺跡	〃 〃 〃 〃	弥 生	人骨・貝輪
11	花里崎遺跡	〃 〃 〃 花里崎	縄文前期	曾畑式・石鏃
12	柵の峯遺跡	〃 〃 柵の峯	縄文早・中期	塞ノ神式・春日式・叩石
13	本立遺跡	〃 〃 本立	縄文前期 弥生？ 歴 史	曾畑式・磨製石斧・打製石斧 紡錘車・瑞花鴛鴦八稜鏡 須恵器
14	院房遺跡	〃 現和	平安時代	灰釉陶器・越州窯青磁 長沙窯青磁
15	西俣遺跡	〃 〃	中 世	
16	道月ノ峯遺跡	〃 〃	中 世	土師器・須恵器
17	武部遺跡	〃 〃 武部	縄文後期	



第3図 周辺遺跡採集の土器（寺師見国採集，黎明館所蔵）

1~6：国上，7・8：国上奥神社，9~17：西之表市内

1・2・9~13：塞ノ神式土器，3~6：黒川式土器，

7・8：土師器（古墳時代），15~17：土師器（平安時代）

また、これらの遺跡はこれまで長い間弥生時代前期から後期にかけてのものとされてきたが、最近ではその一部が古墳時代まで下ることが明らかになった。

種子島の古墳時代の様相については、長く不明だったが、古墳時代の土器がしだいにはっきりしてくれるにつれ徐々に解明されつつある。弥生時代後期とされていた西之表市上能野貝塚・田ノ脇遺跡・中種子町輪之尾遺跡などは古墳時代まで下り、さらにそれが大きく2時期に分けられるようになった。また、西之表市横峯遺跡では畿内系の墓である円形周溝墓が発見された。

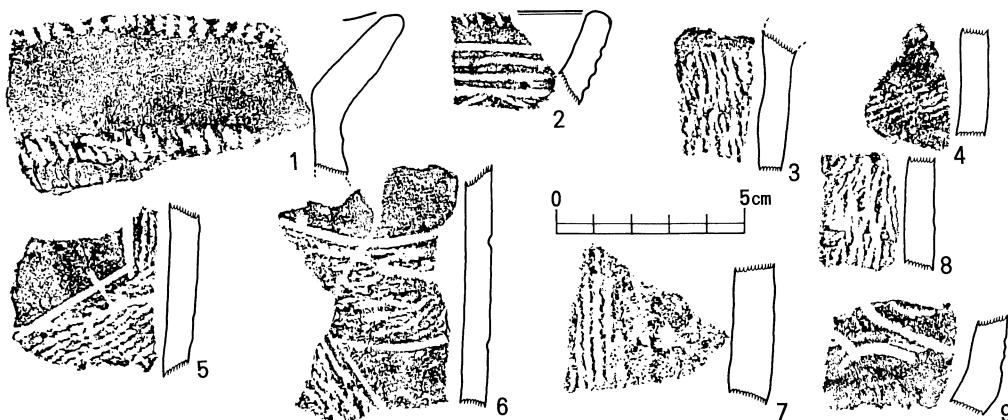
日本書紀には中央とのつながりを示す記事が7世紀からひんぱんに出てくる。そして714年には島印を与えられる。一国としての独立である。今、当時の島府、島分寺の位置は不明であるが、こうした様相を考古学の面から追求できる日もそのうちに来よう。

### 第3節 今平古墳群の概要

今平古墳群は、西之表港の後背台地にあたる海岸段丘の大字西之表字今平に位置している。台地の西側が急な傾斜で西之表市街地へおりており、東へはゆるやかに下降している台地西端近くにあり、ここから東へ向かって舌状にのびた台地先端部、標高80mラインに沿って並んでいる。東側には狭い谷水田が続き、台地南側低地には鴨女川（こうめがわ）と呼ばれる川の流域に水田が開けている。同じ海岸段丘の西側の下の段には、市来式土器・一湊式土器・西平式土器・納曽式土器など縄文時代後期の遺物が出土した納曽遺跡や、曾畑式土器と磨製石斧・扁平石斧・石皿・叩石などが出土した縄文時代前期の本城遺跡がある。また、縄文時代早期の塞ノ神式土器が出土した新城出口遺跡は、古墳群と同じ種子島実業高校敷地内の校舎群の西端、道路と接する付近にあった。河口貞徳氏の所蔵されている土器（第4図）は、ほとんど塞ノ神A式土器である。口縁部は口唇部にヘラ刻み、頸部にヘラ押圧文のあるものと、口唇部にヘラ刻みとその下に横あるいはハの字状の凹線があるものとある。胴部は曲線と直線に挟まれた縄文、あるいは縄文のみのものがある。

古墳群はすべて高校敷地内にあり、現在、形が残っているのは2基だけであるが、以前の状況を知っている人々の話によれば、あと3基ほどの古墳があったようである。そのうちの2基は、既に消滅している。あとの1基は、埋もれているといわれているが、確認はできていない。以上のことから考えて、この古墳群は5基以上の古墳から成り立っていることが予想できるが、1基ははっきりしないから、仮にこれらを北側から順に1～4号墳と名づけることにする。このうち1号・4号墳を現在見ることができ、2号・3号墳はすでに消滅していることになる。

消滅した2号墳は校舎群の東側の、東に向かって傾斜し始めているハウス1号と呼ばれているビニールハウス群のあたりにあって、こんもりした塚状を呈していたといわれている。すぐ東側の一段下がった果樹園1号と呼ばれている所に1号墳がある。2号墳の天井石だったといわれている砂岩の扁平石が、近くの傾斜面に転がっている。これは、平面が2.5m×1.6m、



第4図 種子島実業高校敷地内出土の土器

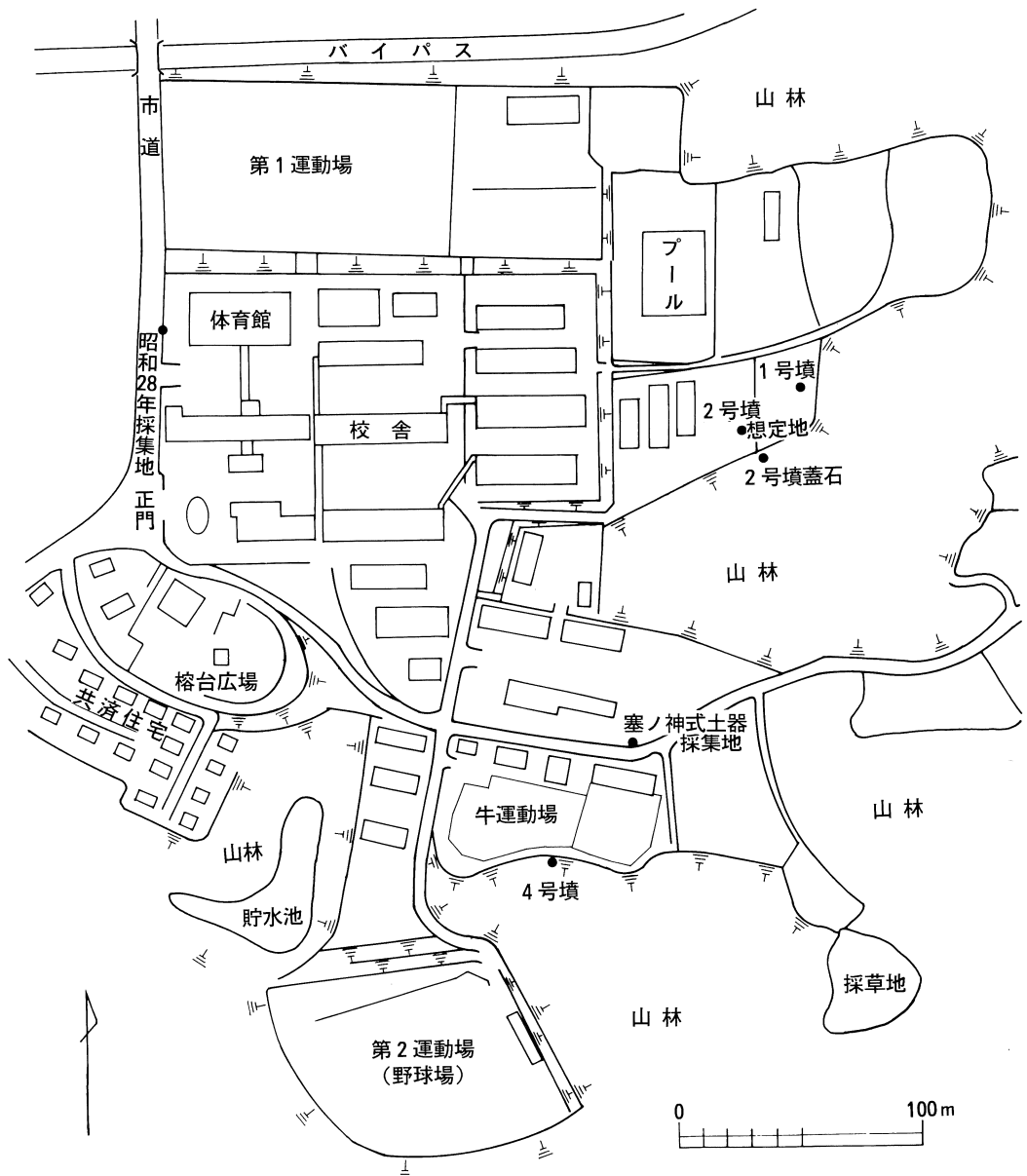
1～8：塞ノ神A式土器、

9：不明（河口貞徳氏所蔵）

厚さが約0.5mもある大きな石である。また、1号墳と2号墳の間にある土手には多くの扁平石が放置されているが、これらは、両墳の、あるいは1号墳の側壁に積まれていた石材だった可能性もある。

消滅した3号墳、埋もれているといわれている古墳は、ともに4号墳の東、あるいは東北方向にあったといわれており、4号墳の両側には巨石が2、3個転がっている。

4号墳は、1号墳の約200m南、古墳群の中では最も南側に位置しており、レベル的にも最も高い位置にある。4号墳の北側は、牛の放牧場として開かれており、その時に埋められてい

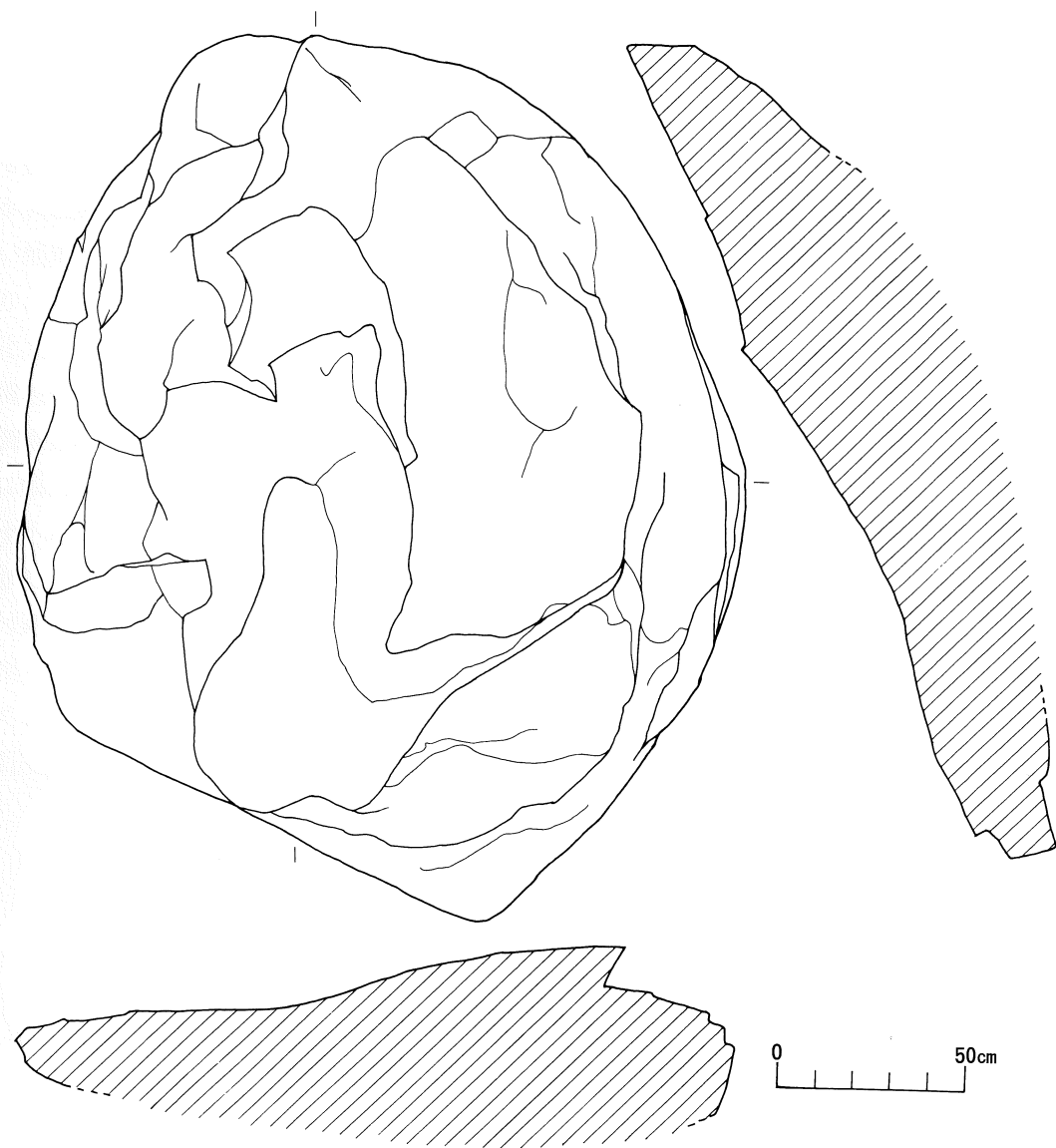


第5図 種子島実業高校敷地内の遺跡分布図

平  
た  
方  
最  
い

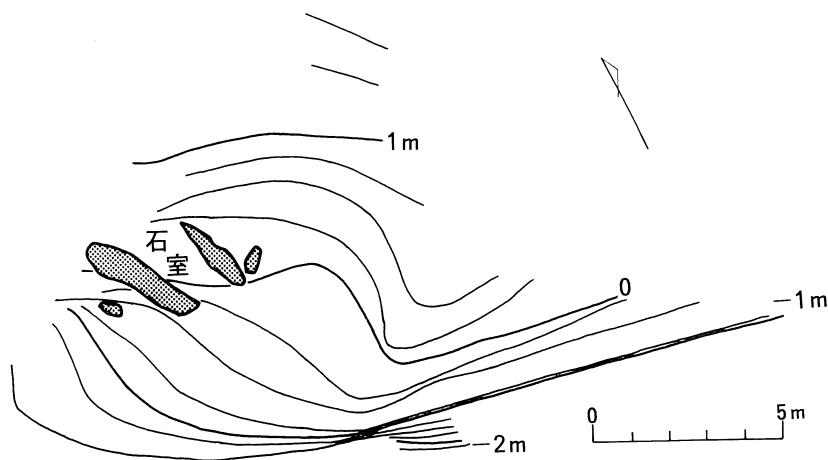
る。南側は、畑に開墾された時に削られており、なくなっている。したがって、今では中央部  
付近の約11m幅だけが東西に長くみえるだけである。これもまた西側が開墾のために削られ、  
かつての農道、あるいは竹やぶのため現状では墳丘の規模・形態などは不明である。標高約80  
mのところにつくられており、現在は高さが約1.5m確認できる。墳丘自体も削平を受けてお  
り、石室様のものが露出している。

側壁石と思われる石が左右各1枚ずつ確認できるが、側壁の石は更に奥へ続く可能性があり、

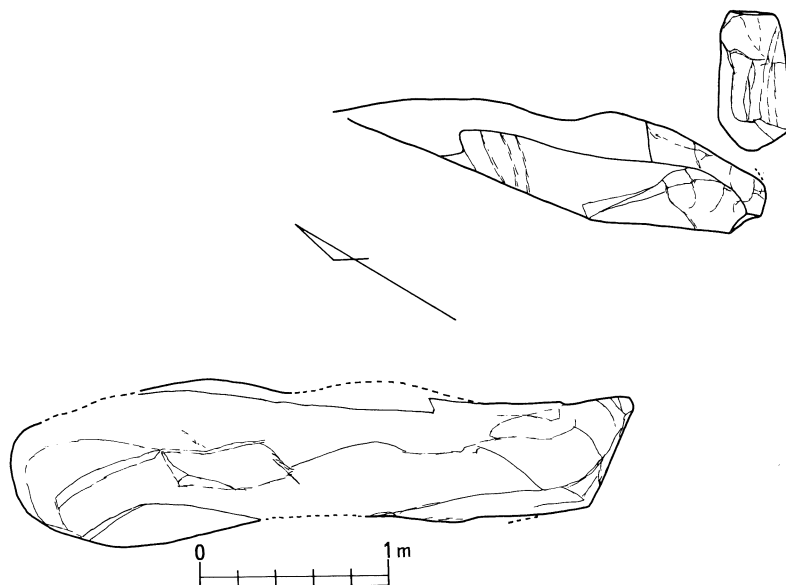


第6図 2号墳蓋石

その全容は不明である。2枚のうち西側の石は原位置にあると思われるが、東側の石は内側に倒れている可能性が強い。そのため、正確な幅は不明だが、内のりで約1.5mある。長さは北端が確認されていないためはっきりしないが4m以上ある。使用している石は砂岩で、西側の石が長さ3m、厚さ0.8m、東側の石が長さ2.3m以上、厚さ0.6mある。なお、東側の石の南東隅近くに長さ0.7m、厚さ0.4mの石があるが、これが動いている石なのか、玄室と羨道部との境石なのかははっきりしない。また、西側の石の西に接して長さ0.9m、厚さ0.3mの石がみられるが、これも原位置を動いている。さらに、その西側にも長さ2.5m、厚さ0.3mあるものなど2、3の側壁石と思われる大きな石が転がっている。



第7図 4号墳周辺地形図



第8図 4号墳石室

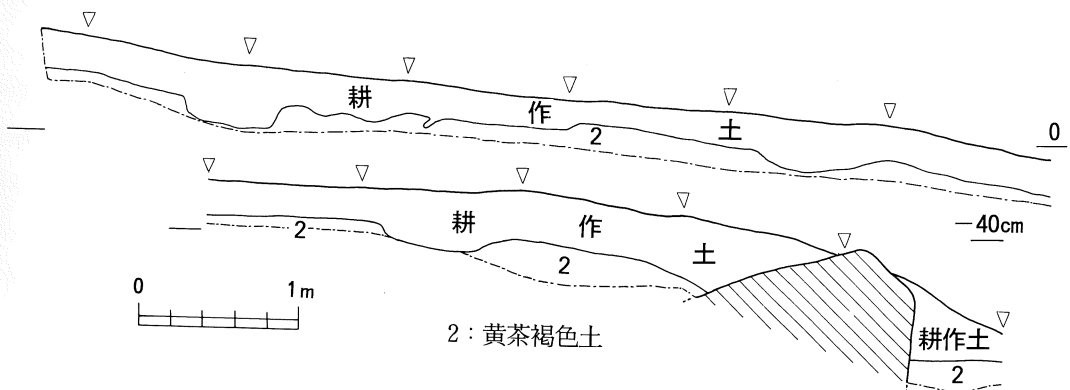
### 第3章 1号墳の調査

1号墳は種子島実業高校の正門をはいって校舎の間を抜け、さらにプールの横を通過してまっすぐ東へ行った県有地のほとんど端部にある。北西側には花園や育苗園，北東側にはみかん園があり，その間は幅2mほどの道が通っている。西側の一段高い所には土手を隔ててハウス群があり，南，東側は個人有の山林になっている。1号墳周辺には現在，ビワの幼木が植えられている。

ここは古墳群のなかではもっとも北側に位置しており，またもっとも低い標高80mのところにある。東に向かってゆるやかに下降している傾斜面の端部近くにあり，東側は急傾斜で谷に落ち，山林を経て，水田へ続いている。すでに，みかん園造成の時に若干の削平をうけて旧地形を損なっているが，上段との間の土手には元来あったという木の切株も残っており，その造成が大規模でなかったことを示している。石室の北側には狭い谷が入り込んで，そこから幾分強い傾斜で北へ上がっている。この周辺の地層をみると，まず黒褐色をした表土（耕作土）があり，その下にアカホヤ層，さらに黄褐色をした風化土と続き，地山の岩盤となる。黄褐色の風化土には扁平な砂岩が含まれている。耕作土は黒褐色を呈しているが，南側は風化土が混ざって黄色がかっている。

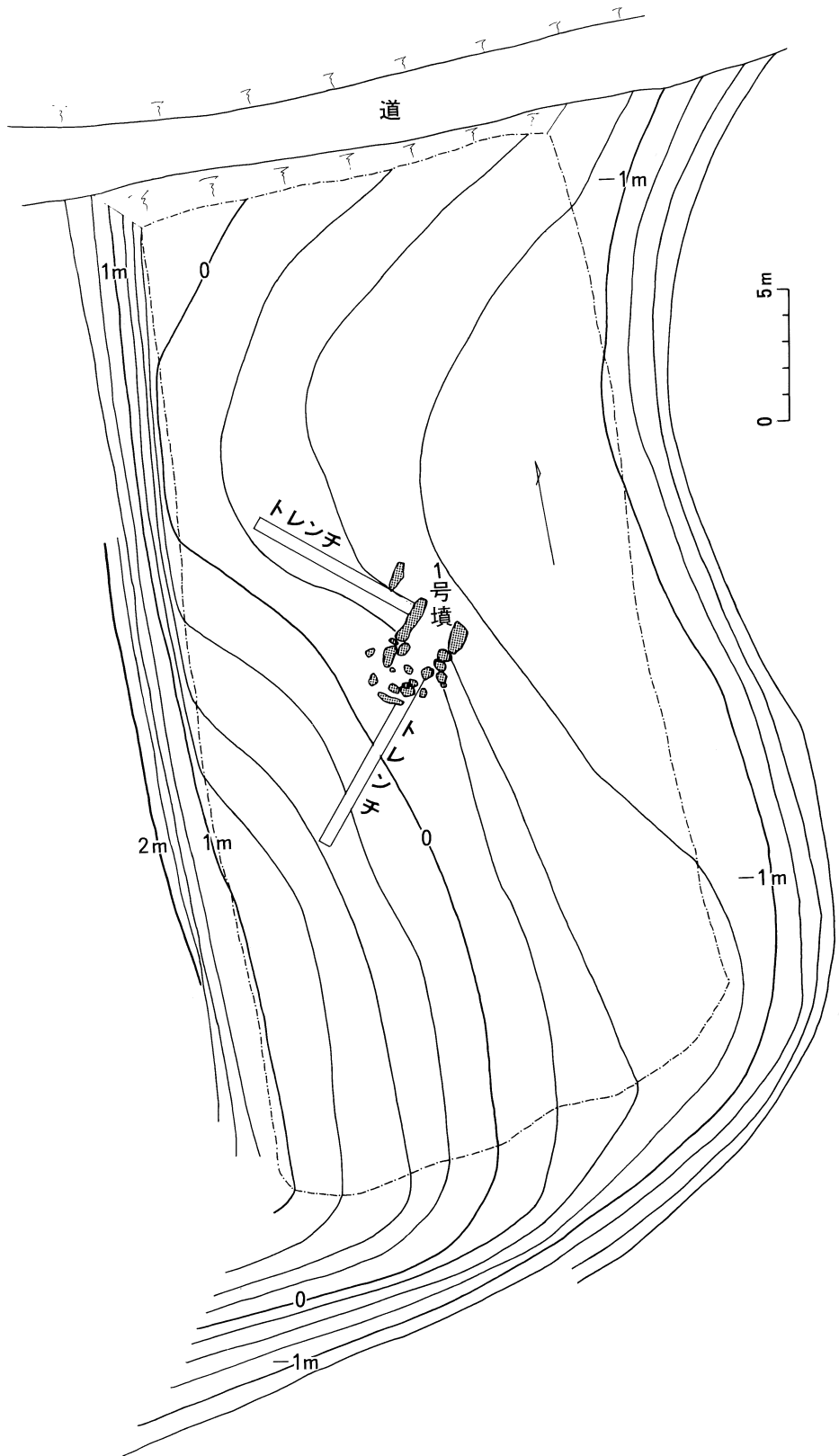
調査は石室内部の埋土除去と並行して，石室の中央と思われる所を中心にしてそこからL字状に幅50cmのトレンチを設定し，墳丘の確認に努めた。石室の南西側に設定したトレンチでは，表土下20cmほどで地山になり，すでにアカホヤ層は失われている。石室付近では大きな石が出てきた。北西側に設定したトレンチでは1mほどの表土があり，その下は火山灰土である。石室付近では1.2mほど下に地山が出ているが，しだいに北へ向かって下がっている。2mほど北側では約1.2m下にアカホヤ層が見られ，さらにいくと耕作土が深い所まであり，谷状をなしていることが分かる。

石室は幅1.7mの間隔をおいて東側に3個，西側に2個の巨石がみられ，その奥行は約3mあ



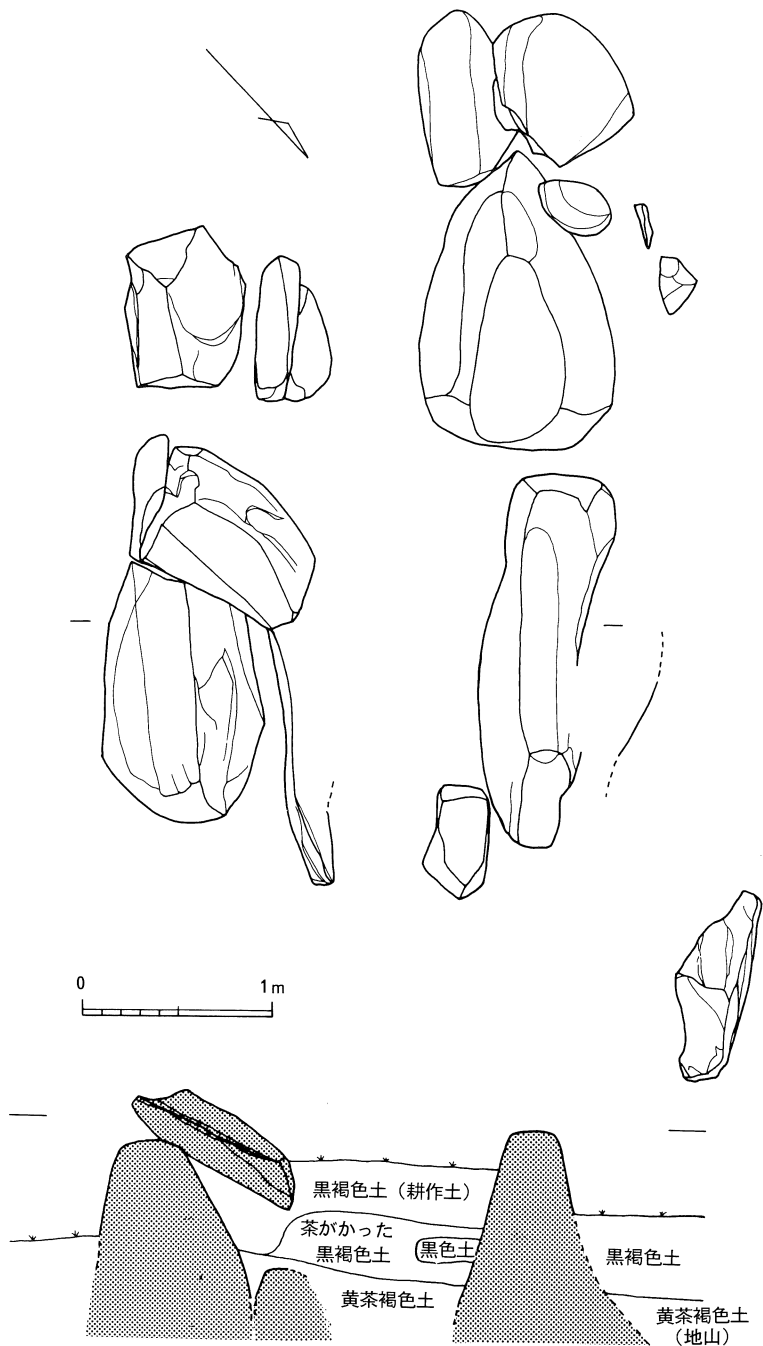
第9図 1号墳南西側トレンチ断面図





第10図 1号墳周辺地形図

た。この内部には人頭大の礫が多く入っていたが、これらは少量の黄褐色粘質土とともに30cmの厚さにあり、その下には耕作土があったことから、農園に整地した時のものと思われた。厚さ約30cmの耕作土の下には、風化した土とともに扁平な砂岩礫が含まれている地山の黄茶褐色土があり、石室内にはアカホヤ層はない。黄褐色土をさらに掘り下げていくと奥部にあったこれらの石は、お互いにつながっていた。石室の北側でも巨石と巨石との間に巨石がのぞき、これらはほぼ平行に並んでいる。東側の巨石列は3個のように見えたが、手前2個は元々1個のものが剥離したものであった。



第11図 1号墳石室

## 第4章 まとめ

1号墳は横穴式石室のように見えていたが、発掘調査の結果、自然の石であることがわかった。大きな岩が長い間に裂けていき、そのあいだに土が入ると同時に、中央にあった岩が風化して地表面下に隠れてしまって出来上がった現象である。元来、一枚の巨石だったものが分かれていき、風化すると一般的には丸い石として残るものがたまたまこの部分では方形に残ってしまったものと思われる。西側手前の石はトレンチ調査によって、深くなるにしたがって西の方へ広がっていることがわかった。この現象は他の石においてもいっしょで、下になるにしたがい広がっていた。その形成された時期は、石室のなかにアカホヤ層がなく、石室の北端部では地表面下20cm足らずでアカホヤ層が出てくることから、今のような状況になるのはアカホヤ層の堆積した6300年前（縄文時代前期）以降であることが想定できるが、石室の中にも耕作土が上部にしかないことからすでにこのころには今の形と似たような状況にあったことが伺える。

種子島の古墳文化は、南九州との共通要素が少ないこと、そのために土器の位置づけがはっきりしなかったことなどからこれまでよく分かっていなかった。しかし、南九州の古墳文化解明が進むにつれて、しだいに種子島の古墳文化もはっきりしつつある。これまで弥生時代後期とされていたもののほとんどが古墳時代のものであることが分かってきた。それもまた前期と後期とに大きく二分されている。しかしながら、集落遺跡についての調査はまだされておらず、今わかっているのはほとんど墓地の遺跡である。ここでは今平古墳群の位置付けを考えるために、この墓地遺跡について簡単にその様相を記してみたい。

古墳時代の墓地は大きく在地性の様相が強い土壇墓と、畿内系の様相をもった周溝墓・高塚古墳とに分かれる。前者に属するのが南種子町広田遺跡・中種子町鳥ノ峯遺跡・西之表市田ノ脇遺跡・上能野貝塚・椎ノ木遺跡などであるが、これらの中には種子島独特の埋葬法・習俗・副葬品などのみられるものも少なからずある。

例えば、広田遺跡は南九州とも他の南西諸島各地とも異なる珍しい様相をもっている。広田遺跡は弥生時代前期の下層と、古墳時代前期の上層との2時期に分かれ、それぞれに特殊な文化をもっているが、ここでは関係のある上層だけについて考える。上層の人々は、集骨再埋葬が通常である。頭骨や四肢骨などを集めて、石で石棺状に囲んだもので、その直下には20~30cmの厚さにわたって、焼けた貝輪や貝の小玉などととも焼骨層がみられる。副葬品には、長方形や台形などいろいろな形をした貝符、貝輪、貝小玉などがある。下層の貝符にはつづるための孔があったのに対して、上層の貝符には孔がない。再埋葬時に一種の明器（古代の中国で、死者が死後の世界で使用する物として副葬したもの）、あるいは何かの呪術用のものとして多数作られたのではないかと考えられている。この中には、日本でもっとも古い字だといわ

れている「山」字が書かれたものも含まれている。鋭い刃物で彫られた隷書体の字である。

ここからは百体近くの人骨が発見されているが、この人たちの平均身長は男性が154cm、女性が144cmである。この平均身長は椎ノ木遺跡の男性153cm、鳥ノ峯遺跡の男性平均値154cm、女性平均値141cmによく似ているが、これらの数値は南九州の古墳人の平均値、男性158cm、女性147cmに比べても低く、種子島人は極端な低身長だといわれている。また、頭の形、顔の形もやや変わっている。先史時代の風習のひとつに、健康な歯を1本から数本抜く「抜歯」というものがある。この風習は縄文時代中期に始まり、弥生時代後期にはほぼ消滅する。ところが、種子島の古墳人骨にはその風習が残っている。広田遺跡の他にも鳥ノ峯遺跡と椎ノ木遺跡の人骨にその風習が残っている。抜く歯は時代によって、地域によってそれぞれの特長がみられるが、種子島は南九州とも他の南西諸島とも異なる様式をもっている。それは下顎の歯を抜かないで、上顎のみの歯を抜くというものである。これは縄文時代以来続いている種子島特有の様式である。このような在り方を永井昌文氏は中国戦国時代のものや台湾高砂族の一部にみられる様式に近似するとし、春成秀爾氏は「飛地的な特異なあり方をみせる種子島の偏則性のI系抜歯様式も中国南部から伝来した可能性が強い」と記している。

また、鳥ノ峯遺跡ではその使用している数は一定していないが、8～75個の人頭大ほどの円礫を土壌の上に乗せた覆石墓という特殊な墓が発見されている。形状はだ円、あるいは円形を呈し、サング塊を2～3個組み合わせたものもある。覆石の下には1～5個の円礫を配したものの、胸の上に自然礫やサング塊を置いた例もある。覆石周辺に供献土器・磨製石鏃のあるもの、送り火の風習を残すものもある。こうした覆石墓は小浜遺跡、田ノ脇遺跡にもみられ、種子島特有のものといえることができる。

このように特殊性だけが目立つ種子島であるが、畿内系の文化ははいって来なかったのだろうか、来たとすればいつごろだったのだろうか。

『日本書紀』によれば、推古天皇24年(616)の条に、掖玖人の来朝が記録されており、天武天皇6年(677)の条には多禰嶋人らを饗応すとある。そして舒明天皇元年(629)には田部連を掖玖に、天武天皇8年には倭馬飼部造連らを多禰島に遣わし地図を作らせ、風俗、産物などを報告させたという記事がある。このように文献では7世紀になると、大和と種子島、屋久島とのつながりがあったことがわかる。このことは考古学の上からも追うことができる。西之表市現和にある横峯遺跡には4m×5mの楕円形を呈し、廻りを幅1m、深さ60cmほどの溝が巡った円形周溝墓が発見されている。中央付近には1m×2mの楕円形をした土壌がある。溝の中からは十数点の土器片が出土しており、すべて口縁部が肥厚した上能野式土器と呼ばれている6世紀ころのものだから、これもまたこのころのものである。これは、宮崎を経由して来たものと思われる。いまひとつの畿内系の文化が今平古墳群である。今回の調査によって高塚古墳の可能性が高かった1号墳が古墳でないことと断定されたことから、高塚古墳伝播論は今のところ慎重であらねばならないが、将来に残された問題として今後も注意しておかねばならないだろう。

721年には多禰嶋として国なみの扱いを受けた種子島、そこに6世紀ころの高塚古墳が存在するとすれば、島府の位置も想定されるかも知れない。そういう点でみると、あとで記す8世紀の須恵器の存在はまた一つのがかりを与えてくれるかも知れない。種子島における古墳時代から古代の研究はようやくそのスタートに立ったばかりである。その意味において今平1号墳の調査は初期の目的こそかなわなかったものの、今後に向けての目標を持った調査の第一歩だったのではなかろうか。

### 参考文献

- 盛園尚孝「先史時代」『南種子町郷土誌』1987年 南種子町  
永井昌文「古代九州人の風習的抜歯」『福岡医学雑誌』52巻8号 1961年 九州大学医学部  
春成秀爾「抜歯」『弥生文化の研究』8 1987年 雄山閣出版  
中村耕治「横峯遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』5 1977年 鹿児島県教育委員会  
中村明蔵「南島と律令国家の成立」『隼人文化』第19号 1987年 隼人文化研究会

## 第5章 種子島実業高校所蔵の遺物

先に記した国分直一氏の論文によると、当時の高校には約100個の石器が保管されているとしてあるが、今ではその一部が残っているだけである。石器だけでなく、いくらかの土器もあるが、これらのほとんどには出土地が記してなく、どこから出たのかはっきりしない物が多い。しかし、これらの中には高校敷地内の物も多く含まれていると思われるので、その一部を紹介したい。土器のうち文様のあるものはほとんど図化し、石斧等の一部が図化出来なかった。

### 第1節 土器

土器には出土地が記していないが、当校は塞ノ神式土器の遺跡として知られており、その関係の物が多い。

#### (1) 塞ノ神式土器(1~38)

口縁部は頸部から外へ強く広がっているが、ややふくらみをもっているもの(1・2)、直線的にのびるもの(4・5)、あるいはやや外反するもの(6)の3種に分けられる。調整は内面、外面ともヘラによる横ナデ調整である。1~3は同一個体で、口唇部にヘラ刻みがあり、口縁上半部にはヘラによる3条の鋸歯文、更にヘラ刻みが付される。口縁下半部から頸部、胴部上半部にはヘラによる横方向、あるいは斜め方向の凹線文が施される。4、5は外面に二枚貝の殻頂部による圧痕が3段に施され、口縁頂部にはヘラ押圧文がある。4は口縁端近くの内面をヘラでナデてうすく仕上げている。6は縦方向のヘラ沈線がある。7は口縁部が短く、頸部からやや外へ脹らんでいる。口縁頂部にヘラ刻みが、頸部に半截竹管文が見られる。

存在  
8世  
墳時  
1号  
一步

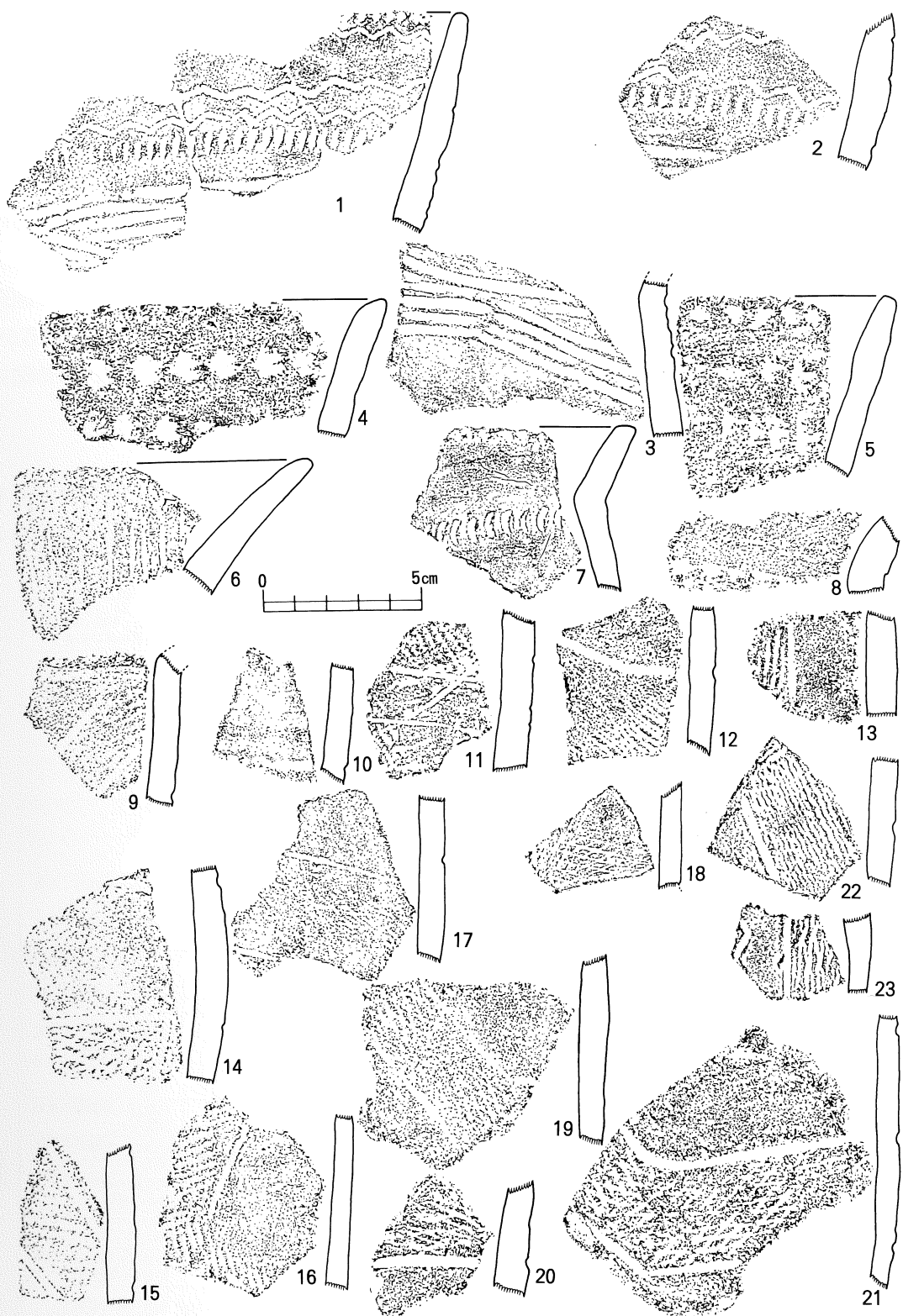
医学

教育

ると  
もあ  
多い。  
紹介  
と。

の関係

), 直  
調整は  
あり,  
部, 胴  
二枚  
の内  
、頸



第12図 種子島実業高校所蔵の土器(1)

口縁部と頸部のつながり部分はいく字状に曲がっている。8はその曲がっている部分に逆三角形のヘラ刺突文が見られる。

胴部の破片には文様が付されているものが多いが、無文のものもある。内面はヘラによるナデ調整で仕上げ、ていねいな横方向のものが多いが、粗い条痕ふうのものもある。文様は凹線文・縄文・捺糸文・刺突文などがあり、さらにこれらを組み合わせたものがある。

もっとも多いのは凹線文と縄文・捺糸文との組合せである(9~26)。縦・横・ななめ方向の直線、あるいは曲線の凹線間に縄文・捺糸文が付いている。9は頸部のすぐ下の部分で、上から下へ引かれた左下がりの凹線の中に縄文がある。11は横方向の凹線間にななめ方向の凹線もある。17~21・26は捺糸文のあるものである。23は縦方向の凹線間に捺糸文が見られるが、その左には曲線様の凹線も見られる。24はななめ方向の凹線間に縄目文様があり、その間に横方向の半截竹管文がみられる。25は凹線の代りにヘラによる刺突文が付されている。

27は3本以上の整然とした横方向凹線の下に縦方向の捺糸文がある。

28・29は横方向の凹線の下にななめ方向の凹線のあるもので、28は横方向の凹線の下に5本一組の割合に整然とした凹線と、その間に刺突文がみられる。29は条痕と重なり合った雑然と

図番	色	焼成度	胎土	図番	色	焼成度	胎土
1	明 淡 茶 褐 色	良 好	金雲母・石英・白色石などのこまかい土	20	外 黒 褐 色 内 明 淡 茶 褐 色	ふつう	白色石・石英・黒色石・茶色石の多い砂質土
2	〃	〃	〃	21	茶 褐 色	〃	〃
3	〃	〃	〃	22	淡 茶 褐 色	〃	〃
4	黄色っぽい淡茶褐色	ふつう	白色石・黒色石・石英・茶色石などの細石粒	23	外 黒 褐 色 内 明 淡 茶 褐 色	良 好	〃
5	〃	〃	〃	24	暗 茶 褐 色	〃	〃
6	茶 褐 色	〃	〃	25	外 茶 褐 色 内 暗 茶 褐 色	ふつう	〃
7	〃	良 好	石英の多い微石粒	26	淡 茶 褐 色	良 好	〃
8	〃	ふつう	白色石・石英・雲母の多い砂質土	27	明 茶 褐 色	〃	白色石・金雲母・石英などの微石が多い
9	〃	〃	〃	28	淡 茶 褐 色	ふつう	白色石・石英のこまかい土
10	〃	良 好	〃	29	茶 褐 色	〃	〃
11	〃	〃	〃	30	〃	〃	〃
12	〃	ふつう	〃	31	暗 茶 褐 色	〃	白色石・石英・茶色石などの多い砂質土
13	〃	〃	〃	32	茶 褐 色	〃	〃
14	〃	良 好	〃	33	〃	〃	白色石・黒雲母の多い砂質土
15	明 茶 褐 色	ふつう	〃	34	白みがかった明茶褐色	良 好	白色石・石英の多い砂質土
16	茶 褐 色 (うらは灰黒色)	〃	〃	35	白っぽい灰褐色	〃	黒雲母・石英などのこまかい砂質土
17	白っぽい淡茶褐色	良 好	〃	36	〃	〃	〃
18	淡 茶 褐 色	〃	〃	37	茶 褐 色	悪 い	白色石・茶色石・石英のあらい砂質土
19	〃	ふつう	〃	38	〃	ふつう	石英の多い砂質土

塞ノ神式土器一覽表

逆三  
るナ  
凹線  
方向  
上  
凹線  
るが、  
間に

した線が見られる。

30と32・33は凹線文のみのものである。30はきちんとした2本の凹線であるが、32は雑然とした横、あるいはななめ方向の沈線に近い凹線が十本近く引かれている。

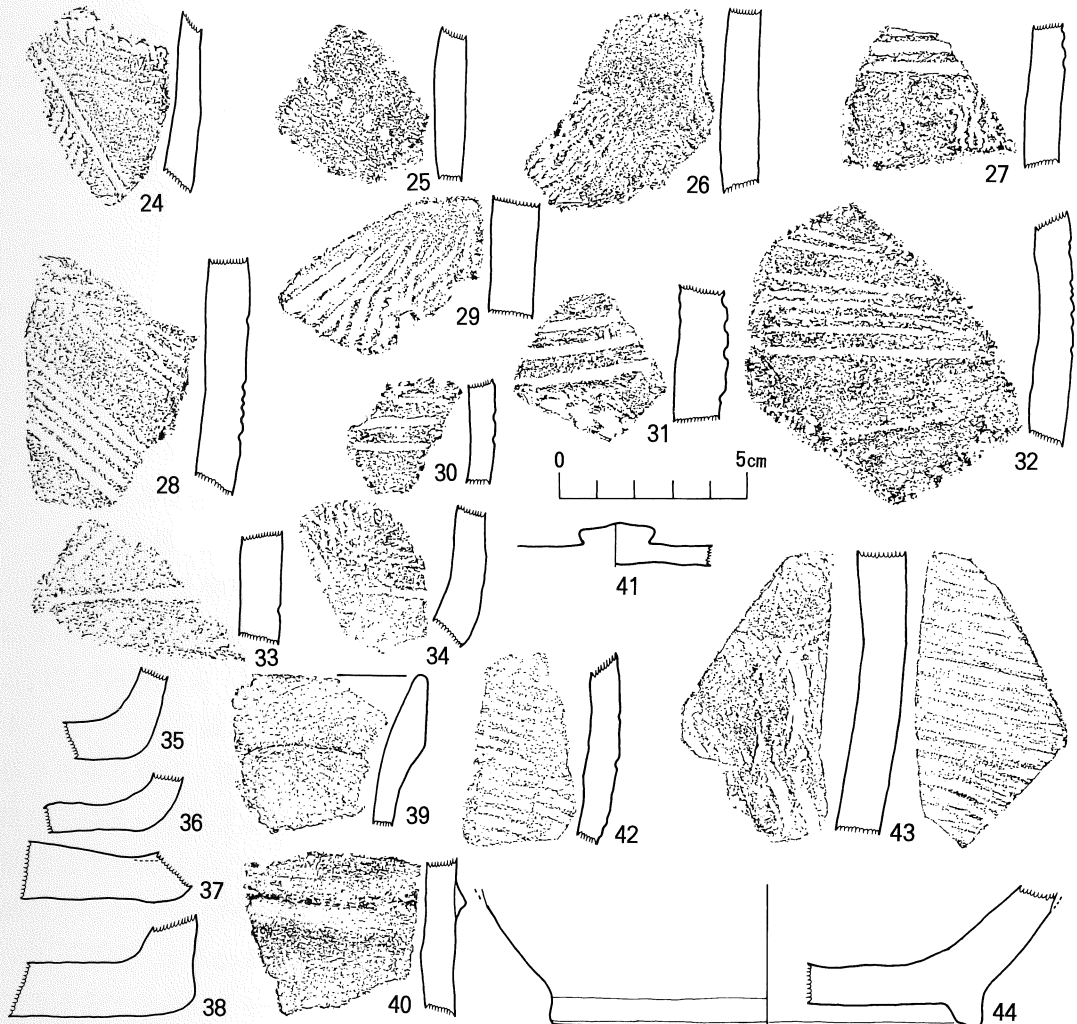
31は三本の横方向凹線と、ななめ方向の二枚貝による押圧文がある。

34は底部近くの破片で、丸みをもって底部へ移っている。底部近くまでL字状の凹線の内側に撚糸文が見られる。

底部には丸みをもって終るもの(35~37)と、やや外へふくらんで終るもの(38)とがある。底面調整はヘラナデで凹凸がある。

## 2 上能野式土器(第13図39)

39は外へ反りながら広がっていく口縁部で、口縁部がややふくらんでいる。この肥厚部にはヘラによる左下がりななめ方向の沈線文が付されている。内外とも貝殻条痕のあとヘラでナデ



第13図 種子島実業高校所蔵の土器(2)



ている。茶褐色を呈し、焼成度は普通である。石英を多く含んだ砂質の土を用いている。

40は1条の貼付突帯がある破片であるが、型式名は不明である。外はていねいな、内は粗いヘラによる横ナデで仕上げている。茶褐色を呈しているが、外はやや赤っぽく、内には黒班も見られる。焼成度は良い。石英・白色石などのこまかい砂質土を使用している。

### 3 須恵器（第13図41～44）

坏蓋・壺・甕が出ている。

坏蓋（41）はつまみ付近の破片である。平坦な天井部に低い宝珠つまみが付いている。内外ともヘラナデで仕上げている。灰色を呈し、焼成度は良く硬い。白い石などこまかい石粒を含んだ良質の土を用いている。

壺（44）は脚台部分である。脚台の端部直径は11cmあり、これは貼り付けによって作っている。端部内面はややくぼみ、ろくろびきで、ていねいに仕上げている。色・焼成度・胎土などは坏蓋といっしょである。

甕（42・43）は胴部の破片である。42は外面が条痕タタキ、内面がヘラナデで仕上げられており、胴部の中でも上半部分だろうと思われる。外面は青味がかかった褐色、内面が赤味がかかった茶褐色を呈し、焼成度は普通である。こまかい石英・白色石の多い胎土である。43は外面が板目の良く出た条痕タタキ、内面が同心円タタキで仕上げている。明茶褐色を呈し、焼成度は良好である。こまかい白色や黒色の石を含んだ土を用いている。

## 第2節 石器

石器には磨製石斧8点、打製石斧2点、くぼみ石4点、砥石1点がある。

### 1 磨製石斧（第14・15図1～8）

磨製石斧には、方形状を呈するもの、バチ状を呈するもの、ラケット状を呈するもの、大型のものがあり、このなかには未製品もある。使用している石材はすべて砂岩である。

1～5が方形状を呈するもので、刃部は弯曲している。1は長さ12.5cm、最大幅5.4cm、厚さ2.5cmで、中央部がややふくらんでいる。両面・側縁ともていねいに研磨し、刃先も鋭い。刃先には刃こぼれがある。2は長さ12.5cm、最大幅5.1cm、厚さ2.4cmで、磨滅が激しい。3は国上出土と付記されており、両面・側縁ともていねいに研磨されているが、よく磨滅している。長さ12cm、最大幅6.2cm、厚さ3cmあり、上部が欠損している。4・5は扁平なもので、4は長さ11.3cm、幅4cm、厚さ1.6cmある。自然面をうまく利用しており、研磨した痕はあまり見られない。片面の刃部には新しい研磨痕がある。川迎で採集されたと記してある。5は長さ12.5cm、最大幅4.5cm、厚さ1.5cmで、刃部に部分的な新しい傷が見られる。これも研磨された部分は少なく、周辺にていねいに敲打を加え形を整えて、刃部を丸のみ形に作っている。6は基部幅3cm、刃部幅8.5cmのバチ状に広がっているもので、長さ16cm、厚さ3cmある。磨滅しているため、研磨痕ははっきりしないが、刃部は鋭く磨いてある。7はラケット状を呈するもので、刃部周辺はていねいに打撃して加工されているが、握り部分は粗い調整である。磨滅している

粗い  
黒班も

内外  
立を含

ってい  
など

られて  
が  
表面が  
成度は

大型

厚  
鋭い。

3は国  
いる。

4は

り見ら

き12.5

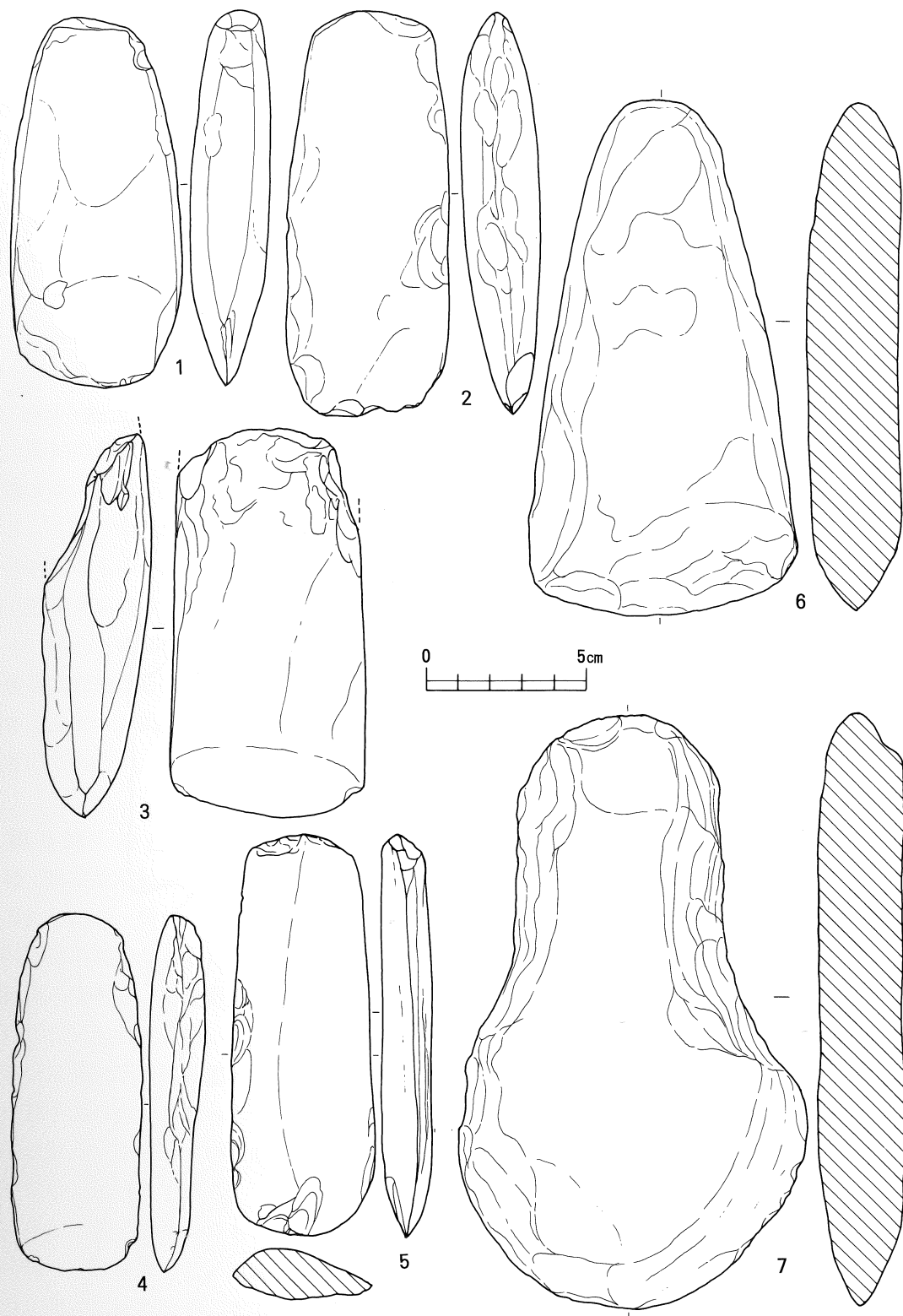
た部分

は基部

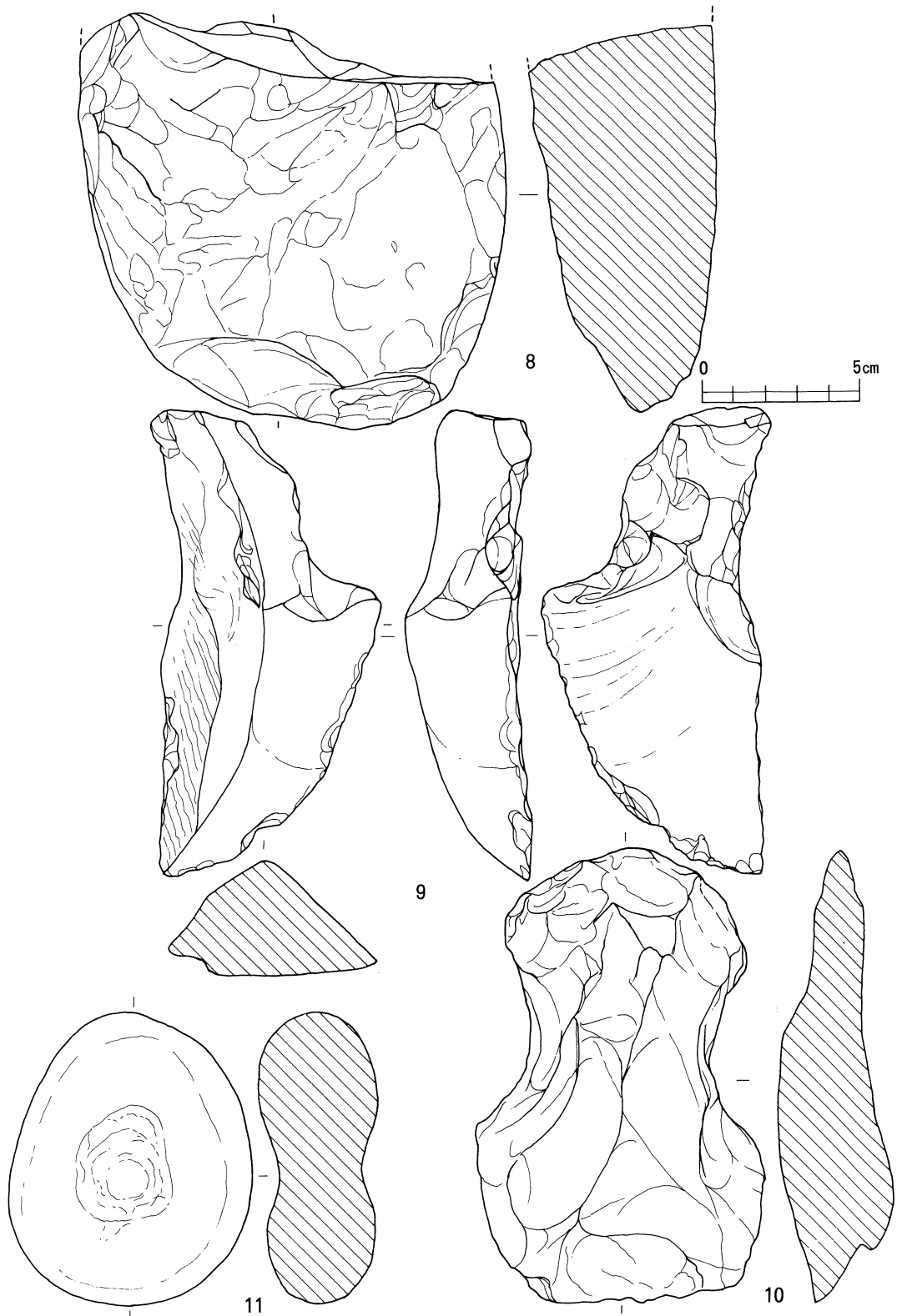
ている

ので、

ている



第14図 種子島実業高校所蔵の石器(1)



第15図 種子島実業高校所蔵の石器（2）

ため研磨痕ははっきりしないが、刃先は鋭い。長さ18.5cm、刃先の幅11cm、握り部幅6.5cm、厚さ2.8cmある。8は刃部のみの破片であるが、幅13.5cm、厚さ6cmと大型である。長さが13cm残っている。自然面をほとんど残さないほど打撃を加えているが、磨滅していることもあって研磨痕は全く見られない。川迎農場から出土したと記してある。

## 2 打製石斧（第15図9・10）

打製石斧には靴形と呼ばれるものと、えぐり状になったものがある。使用している石材は2点とも砂岩である。

9は刃部がいちじるしく弯曲しているものである。数回の大きな打撃で稜のある剥片を作り出し、周辺はこまかい打撃を加えて整えている。断面が三角形を呈しており、その一面は自然面を多く残している。柄部は左右非対象形のえぐりがはいて細くなっている。長さ14.5cm、最大幅6.5cm、厚さ3.6cmある。24年8月1日に採集したと記してあり、国分直一論文によれば、安納の峯遺跡の採集品である。10は刃部が一部欠けているが、中央部にえぐりがある。最大幅9cm、えぐり幅5.8cm、厚さ3cm、長さ14cmあり、全体的に磨滅している。

## 3 くぼみ石（第15・16図11～13・15）

砂岩製のものが4点あり、楕円形のものが多し。12は一部に未使用部分はあるが、周辺には叩き痕が見られる。叩き石も兼ねている。13は周辺に磨り痕跡があり、磨石を兼ねている。

## 4 砥石（第16図14）

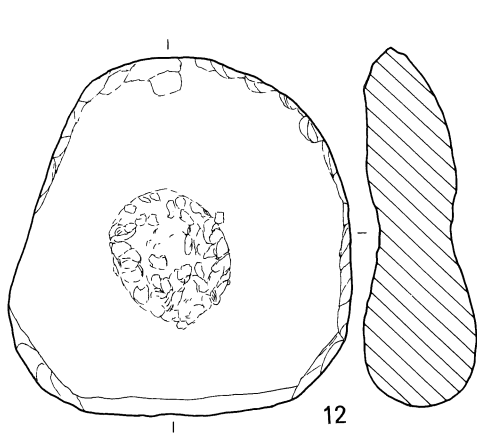
農耕実習地から出土したと記されており、一部欠損している。長さ21.5cm、最大幅12.5cm、厚さ5cmある。両面使用しており、一面は幅1～2cmの筋が5本見られる。反対面は広い幅の研ぎ面であるが、一部細く筋になっている部分もある。砂岩製である。

## 第3節 まとめ

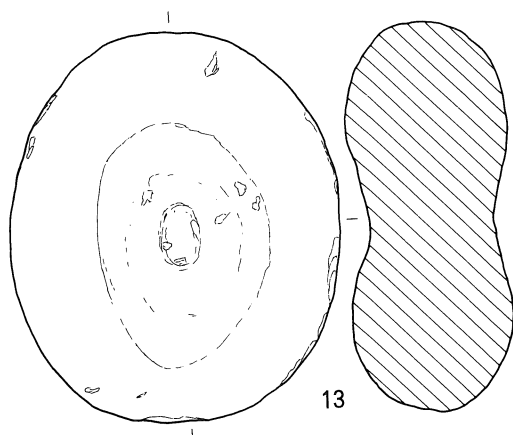
種子島実業高校所蔵の遺物を紹介してきたが、この中には注目される遺物も含まれている。

高校敷地の一角には出口遺跡という塞ノ神式土器を主体とする遺跡や、道路拡張で発見された同時期の遺跡があるため、所蔵の縄文土器もすべて塞ノ神式土器で、細分すると塞ノ神A式土器のみである。上能野式土器は従来、弥生時代後期と言われていたが、今では6世紀ころのものだといわれている。4点の須恵器が同じ地点出土の物かどうかは断定しがたいが、坏蓋と壺はほぼ同時期の物と思われる。これは形態から8世紀後半ころの物と考えられるが、そうすれば種子島におけるもっとも古い須恵器とすることになる。先にも記したようにこれまで考古学的にははっきりしていない古代の種子島を探る手懸かりとなる物であるが、出土地がはっきりしないのは残念である。

石斧には種子島特有のものと言っていい靴形石斧や有肩石斧などがある。また、大型石斧は手に持つには重過ぎて、用途がはっきりしないが、このようなものは中種子町でも発見されており、用途だけでなく、その分布についても今後検討せねばならないであろう。有溝砥石にしても県内では例が少なく、分布・用途・時期について検討せねばならないものである。



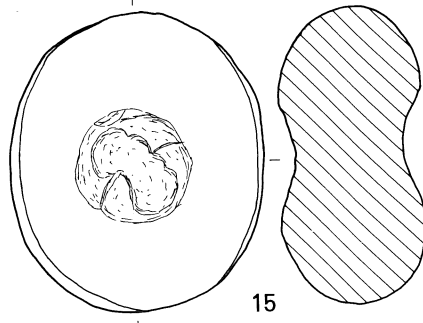
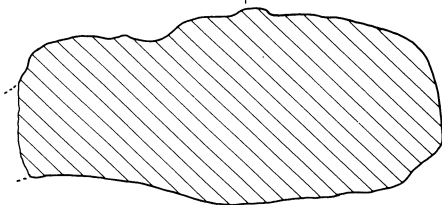
12



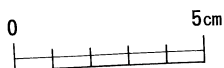
13



14



15



第16図 種子島実業高校所蔵の石器(3)



1号墳近景（北東から、昭和62年撮影）



1号墳遠景（北から）



1号墳遠景（西から）





1号墳近景（北西から）



1号墳近景（北東から）



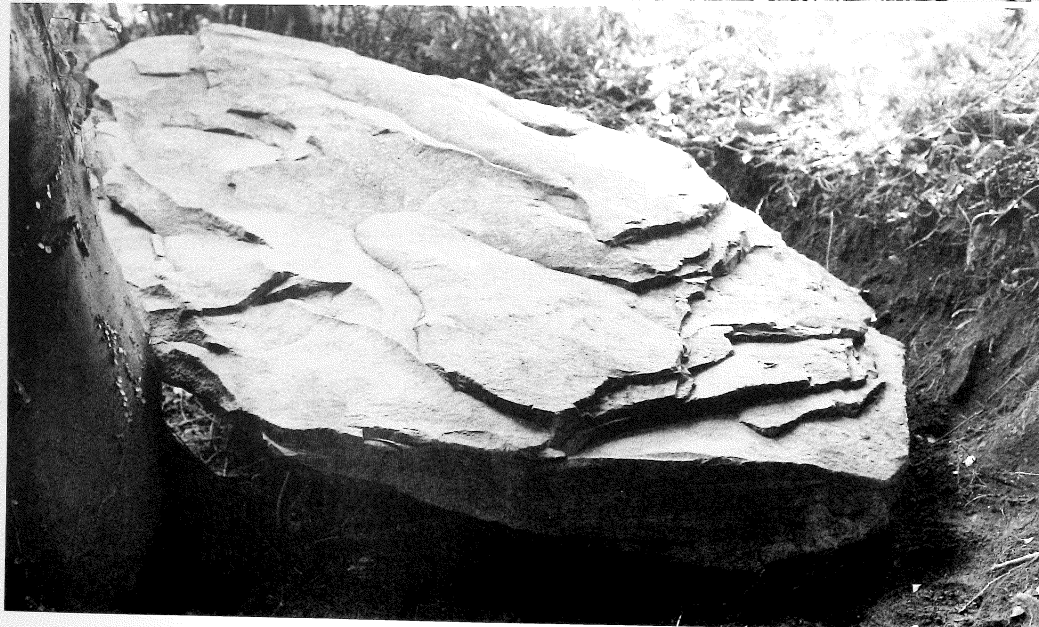
1号墳近景（南西から）



1号墳南西側トレンチ断面



2号墳の天井石と思われる巨石（上は北西から、下は東から）



1号墳近景（北西から）

1号墳近景（北東から）

1号墳近景（南西から）



図版 4

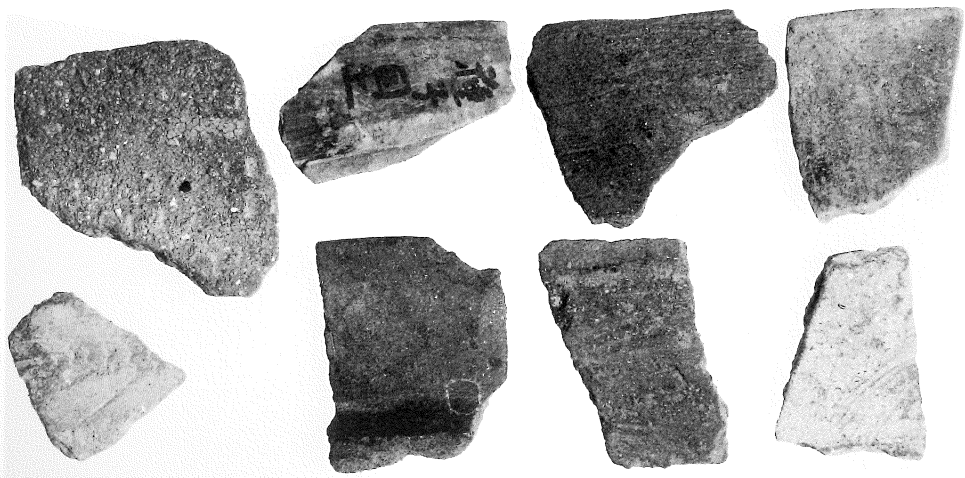


4号墳近景（南東から）



4号墳近景（東から）

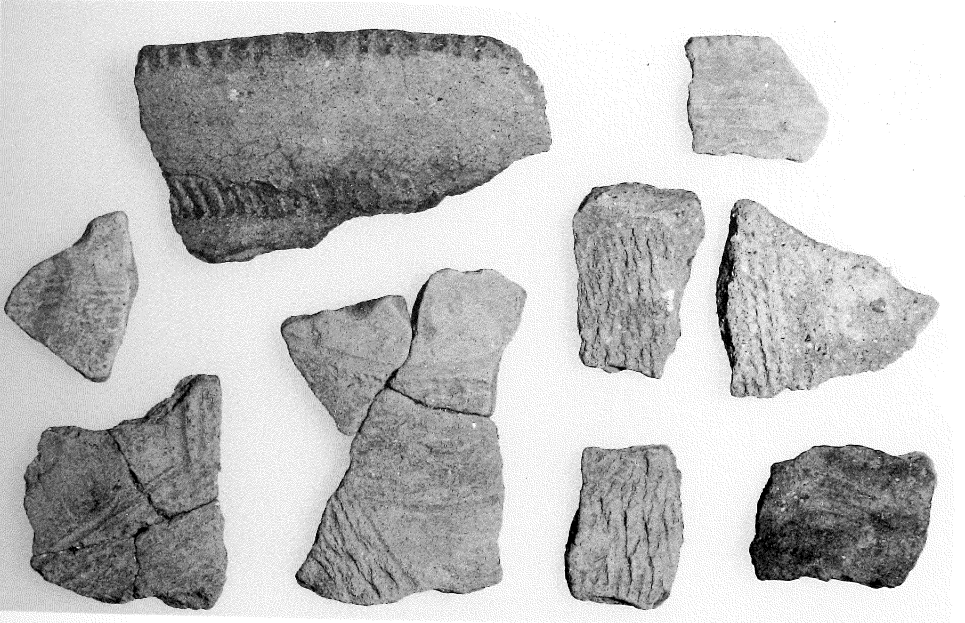
西之表市国上採集の土器



西之表市採集の土器



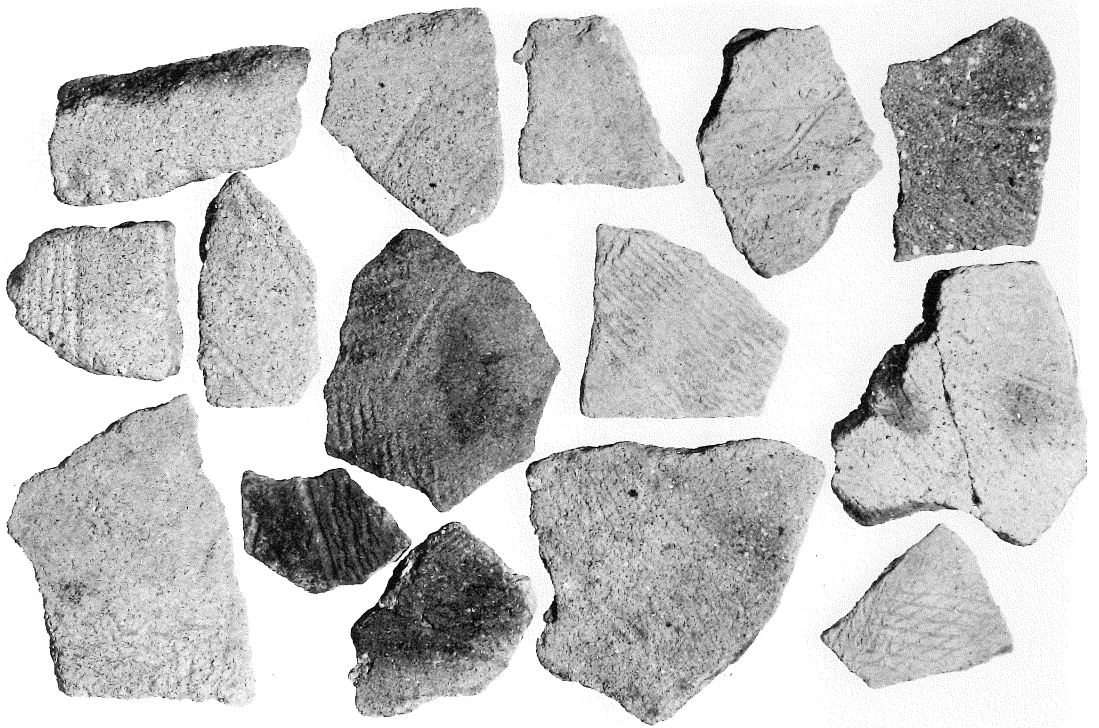
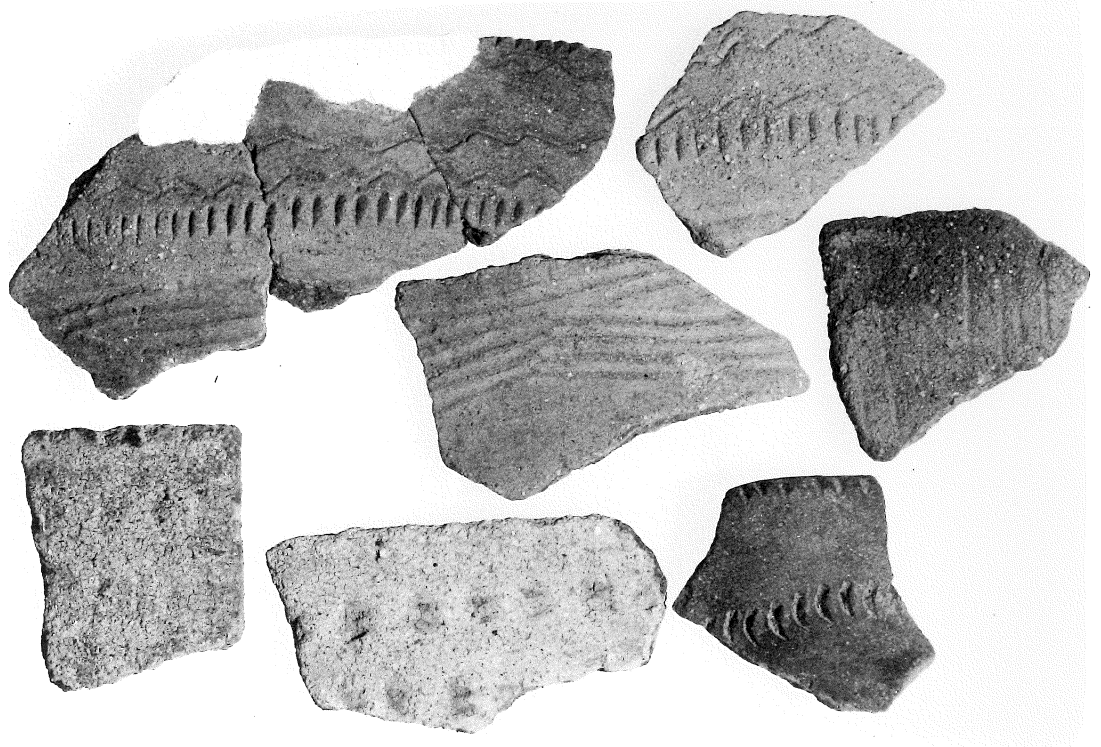
種子島実業高校敷地内出土の土器



から)



から)

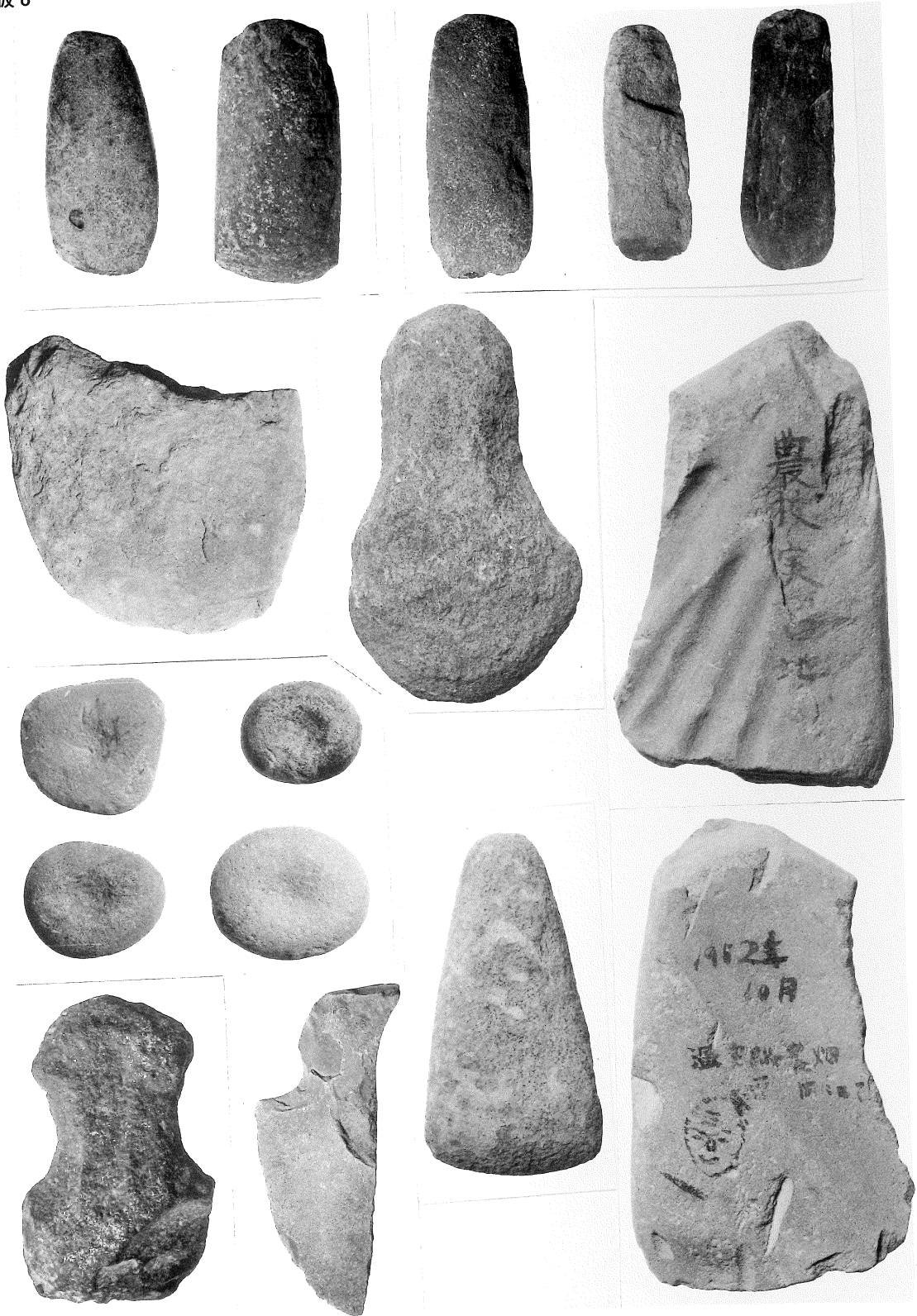


種子島実業高校所蔵の土器（1）





種子島実業高校所蔵の土器（2）



種子島実業高校所蔵の石器

## あ と が き

吉野ヶ里遺跡に明け暮れた平成元年、南の種子島でも従来の歴史観を変えるかもしれない可能性をもった発掘が行なわれた。古代のロマンを求めて吉野ヶ里遺跡を訪れた人は百万人を越えたと言うが、この種子島の現場にも人数こそ比較にならないが、昔の人の残した跡を一目見ようとする人達がたくさん見学に訪れた。しかしながら、学問の世界は非情である。調査結果は残念ながら、古墳であることを否定した。

しかし、今回の調査は文化財保護の面から大きな意義を持っている。今日、埋蔵文化財といえば工事に追われての調査がほとんどであるが、こうした時世にこうしたかたちで純粋な発掘調査が地方自治体の手で行なわれたことは高く評価されると思う。今回の調査では市当局をはじめとして、西之表市の皆さんにはひじょうにお世話になった。心から謝意を表したい。とともに文化財の保存活用のために今後ともこのような調査がされることを期待して筆を閉じることにしたい。

(池畑)

### 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

#### 今平1号墳発掘調査報告

発 行 西之表市教育委員会  
〒891-31 西之表市西之表7612  
電話 (09972) 2-1111

発行日 平成2年3月20日

印 刷 斯文堂株式会社  
〒891-01 鹿児島市南栄3-1  
電話 (0992) 68-8211 (代)